

論文

沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵・SPレコード目録

—田辺尚雄旧蔵・最古の沖縄音楽レコードを探る—

Cataloguing the Hisao Tanabe Collection of 78rpm SP Records
at Okinawa Prefectural University of Arts Library:
A Focus on Hisao Tanabe's Personal Possessions: the Oldest Okinawan Music Records

高橋美樹 (高知大学教育学部・音楽学研究室)

Miki TAKAHASHI

Laboratory of Musicology, Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan

ABSTRACT

The aim of this document is to catalogue, for each record company, the recordings of Okinawan music in the Hisao Tanabe Collection at the Okinawa Prefectural University of Arts Library. The recorded songs were additionally sorted into genres and organized according to singer, musician, and actor activity in the recording. The infancy of the cultural history of recording in modern Okinawa is depicted by tracing changes in the records that went on sale in the period from 1915 until 1936, and in 1958. It is noteworthy that six 78rpm standard play (SP) records produced by Osaka Phonograph Co., Ltd. were discovered in 1915: the oldest Okinawan music records by a commercial recording company. Singers and musicians were selected from among leading advocates of each school of Okinawan classical songs. For both Okinawan and Yaeyama folksongs, a repertoire of songs from Japanese opera and Okinawashibai (traditional Okinawan drama) was recorded using actors and chorus members active in the world of commercial theater, as well as geisha skilled in singing and musicianship. At Columbia Records Co. Ltd., for Miyako folksongs and Yaeyama folksongs, talented singers and sanshin (a traditional Okinawan three-stringed instrument) players celebrated on each island, both male and female, were chosen. Regarding choice of song, Osaka Phonograph chose many Okinawan classical songs, while Nipponophone Co., Ltd. chose many Okinawan folksongs. Additionally, Columbia focused on Okinawan classical songs, while also actively recording new folksongs. Meanwhile, Nippon Record Co., Ltd. recorded Ryukyuan-language folksongs translated into standard Japanese language by Seihin Yamauchi. Many records featured Okinawan instruments, such as the sanshin, fue (whistle), taiko (drum), koto (harp), and kokyuu (four-stringed fiddle). However, for new folksongs, there was active use of Western instruments, such as the violin or piano. Recording was undertaken by musical instrument stores in Naha, with mainland record companies being asked to manufacture the discs. Musical instrument stores placed advertisements for the records in newspapers and promoted lists of their new recordings. It was found that the basic system for commercial recording (record, manufacture, promote) was formed in the period from 1915 to 1936.

はじめに

本稿では沖縄県立芸術大学附属図書館「田辺文庫」所蔵のSPレコードについて報告する。「田辺文庫」には、日本における民族音楽研究のパイオニア・田辺尚雄(1883-1984)が1922(大正11)年に実施した「沖縄・八重山諸島音楽現地調査」に関する文献、楽譜を始め、沖縄音楽のレコードが所蔵されている。これらの資料は2002年に長男・田辺秀雄(1913-2010)から寄贈されたものである。田辺文庫の中で、1922年の沖縄・八重山音楽調査に関する資料については高橋2017で報告した。調査時点で、SPレコードの所蔵については把握していたが、発行年を特定する上で多方面の資料と照合する必要がある、目録を完成させるまでに予想以上の時間を要した。さらに、2014年に音源がデジタル化されたことにより、楽曲の聴取が可能となった。

本稿の目的は各レコード会社別の目録を作成し、1910年代～1950年代に発売された沖縄音楽レコードの変遷を辿ることである。さらに、録音曲目に見るジャンル分類を実施し、録音に起用された歌手・演奏家・俳優の活動についても整理する。

特筆すべきは、商業録音による最古の沖縄音楽レコードが田辺文庫に所蔵されていることである。1915年大阪蓄音器株式会社(以下、大阪蓄音器)によって最古の沖縄音楽レコードが録音・制作・販売された事実は高橋2011で発表済みであり、那覇市内で初めて録音された実況を報じる新聞記事も詳述した。しかし、高橋2011執筆時点ではレコードの現物を発見しておらず、音源の聴取も実現していなかった。その後、2014年10月に田辺文庫を調査した折、大阪蓄音器のレコードを発見した時の驚きは今でも鮮明に覚えている。

1920(大正9)年に言語学者の北里 蘭^{きたざとたけし}が日本語の起源に関する研究で沖縄本島他を訪問した際、蝸管蓄音器で沖縄音楽を録音していた。それらの音源を大谷大学図書館(京都市)が収蔵していることが判明し、2019年1月1日『沖縄タイムス』は「沖縄歌謡 最古の音源」という見出しで大々的に報道した。同年3月、同大図書館は音源をデジタル化したCDを沖縄県立図書館へ寄贈し(2019年3月28日『朝日新聞』夕刊:5)、同年5月一般公開された(2019年5月30日『沖縄タイムス』25)。北里は研究目的で沖縄を訪問し、現地録音を実施した。だが、本稿で取り上げる大阪蓄音器のレコードは商業録音による音源であり、大衆向けの商品として販売・流通していた。そして、その時期は北里より5年早い1915年である。

本稿では最古の沖縄音楽レコードを含む田辺文庫所蔵SPレコードの史的価値について検討する。なお、引用文の旧字体・旧仮名遣いは新字体・新仮名遣いに改めた。□は判読不明文字を示す。掲載する写真は全て筆者が撮影したものである。

凡 例

1. データは原則的にSPレコードの中央に貼付されたレーベルの表記に従う。ただし、記載された表記に明らかな誤字、脱字が

認められた場合に限り、訂正を加えた。また、人名以外の旧字体は新字体に改めた。

2. 項目は①請求記号、②曲名、③歌手・演奏者、④レコード番号、⑤記載ジャンル、⑥分析ジャンル、⑦レーベル名、⑧レーベル紙・文字色、⑨製造元、⑩推定発売年、⑪備考、とする。

①は筆者が調査した2014年10月20日時点の請求記号である。

④で同一のレコード番号は同一のSPであり、Aは表面、Bは裏面を示す。日本コロムビア発売のレコード番号のみ、左に商品番号、()内は原盤番号を記した。他のレーベルには原盤番号の記載がないため、商品番号のみ記した。

⑤はレーベルに記載された音楽ジャンル名である。

⑥は本研究の分析概念として、沖縄の音楽に関するジャンルの定義を筆者が設定し、分類したものである。「琉球古典音楽」とは琉球王国時代に首里の士族層によって育まれた歌を指す。野村流『声楽譜工四』上巻、中巻、下巻、続巻に掲載の曲目を「琉球古典音楽」に分類した。「沖縄民謡」とは沖縄本島及び周辺諸島で伝承されてきた作者不詳の歌謡を指す。「宮古民謡」とは宮古島及び周辺諸島で伝承されてきた作者不詳の歌謡を指す。「八重山民謡」とは八重山諸島で伝承されてきた作者不詳の歌謡を指す。「奄美民謡」とは奄美諸島で伝承されてきた作者不詳の歌謡を指す。「新民謡」とは作詞者、作曲者が明らかな歌謡を指す。

「歌劇」とは台詞を民謡のメロディーにのせて展開する劇を指す。近代以降、那覇や首里の商業演劇の世界で発展した。「組踊」とは18世紀以来、琉球(沖縄)で伝承されてきた音楽、舞踊、台詞で構成された沖縄独特の伝統楽劇を指す。「御座楽」とは琉球王国時代に江戸上りや冊封使接待のために演奏された宮廷音楽を指す。「願文」とは豊年満作など神に祈願の意を伝える文を指す。「漫談」とは滑稽な語りを主とする芸で、三線伴奏を加え、複数人で掛け合うこともある。「芸能」とは沖縄諸島で伝承されてきた民俗芸能を指し、村落共同体の年中行事や祭りの場で演じられる。「舞踊曲」とは沖縄に伝わる舞踊のための曲を指す。「箏曲」とは沖縄に伝承されてきた箏で演奏する曲を指す。「筑前琵琶」とは明治20年代、筑前博多(福岡市)で橋智定(号、旭翁)らによって創始された琵琶、また、それを伴奏とした語り物(2019『大辞林 第三版』)を指す。「童謡」とは大正期以降、子供のために作詞・作曲された歌を指す。

⑦の表記は英語やローマ字もあるが、目録にはカタカナで記入した。テスト盤など手書きのレーベルについても記載した。

⑧はレーベル紙の地色及びレーベル名、曲名・演奏者名、製造元の文字色について、白・紺・黒・金、えんじの色名を用いた。ただし、地色に2色以上を使用したものは「多色」とした。

⑩について、SPはレーベルに発売年を記載する習慣がない。よって、各レコード会社のレコード目録、各レコード会社の新譜案内(月報)、新聞広告、文献情報、レコード研究者による情報(Web

公開含む)などを基に発売年を推定した。ただし、調査した上で不明なものには「―」とした。

⑩にはCD復刻発売されている音源情報も記した。

1. 大阪蓄音器制作・最古の沖縄音楽 SP レコード

田辺文庫には田辺が1922年沖縄調査の際購入した大阪蓄音器制作のSPレコード6枚が所蔵されている。これらは1915年に制作された商業録音による最も古い沖縄音楽レコードである。1914年は那覇市内に常設映画館の帝国館が開場し(矢野1993:409)、沖縄電気軌道株式会社により那覇市大門前から首里市山川間、約6km半を電車が開通した年である(嘉手川1979:408)。最古の沖縄音楽レコードはその翌年1915年に制作された。

レコード収集家の岡田則夫は沖縄での収集旅行記で「残念ながらこの(筆者注:大阪蓄音器)レコードは稀少盤で、私はまだ1度も見たことがないのである。今回沖縄で期待したのは、これらのレコードを1枚でいいから見本として手に入れることだった」(岡田2003年2月:155)と述べている。結局、岡田はこの時レコードの入手は叶わなかった。著名なレコード収集家でも実物を目にすることがないSPが田辺文庫に所蔵されていた。

さらに、2019年にレコード研究者の大西秀紀氏から酒井公声堂発行『白熊印ナショナルレコード音譜目録:1916年3月改訂版』(図1参照)の提供を受けた。この目録には沖縄音楽レコードの曲名・歌手名が掲載され、SPとの照合を可能にした。そこで、本項では田辺文庫SPについて整理した後、レコード音譜目録の情報を基に最古の沖縄音楽レコードの実態について考察する。

1.1 最古の沖縄音楽 SP レコード

レコード制作の経緯について、高橋2011では次のように紹介した。1915年当時、沖縄ではレコードという新しい録音メディアを導入する気運が高まっていた。それを象徴する出来事として、那覇市石門通りにある森楽器店(那覇市西本町4-46)の主人・森宗十郎が主催し「琉球音楽奨励会」を組織したことが挙げられる。その目的はレコード制作・販売の資金や大阪から沖縄へ録音技師を派遣する費用を確保するためであった。樫尾という録音技師が来沖し、1915年8月28日～31日に城間氏の別荘(那覇市奥武山公園内)で録音を実施した。その後、大阪に録音音源を持ち帰り製造されたレコードは、同年10月20日沖縄の森楽器店へ届けられた。録音状況は良好であり、音質も明瞭であった。当時の新聞記事によると、森楽器店は1915年～1926年に計4回録音を実施している。

川平1974:229によると、「森という人がいたが、この人は後になって石門(いしじょう)の入口に、森そばと楽器店を経営し、大正のはじめごろ、琉球古典音楽と民謡をレコードにして売り出した。夕方になると、森楽器店の店先には人が黒山のように集まり、蓄音器という文明の産物が歌や音楽を奏でるので、店先の

センダン樹の下で群衆が蓄音器の音に耳をかたむけていた風情は那覇の風物詩であった」。石門通りは「新天地劇場から三角そば屋に入り、山形屋百貨店の裏手に出る細長く狭い商店街…中略…石門通りに行けば大抵の日用品は買うことができた…中略…夕方になると蓄音器店は琉球古典音楽、民謡、流行歌などを鳴らしていたので、買い物客ばかりでなく、用もない人たちが石門通りをブラブラ歩いていた」(嘉手川・松村1979:297)。

また、実際に森楽器店で蓄音器やレコードを購入し、聴いていた事例として次の記事が挙げられる。

辻、前の毛4番地出茶内にオトと云う女郎が居るが、通堂の砂糖屋さんが、カロービンカミへ御変更になったたので、其手切金200円を貰て、内50円也は森楽器店から蓄音機1ヶ琉球レコード1組を買求め今度こそより以上の御客を迎えて見ようと、朝から晩まで琉球レコードを替るがわる鳴らして、御金廻りの好い御客を取ろうとして待つて居ます。(前毛生)(下線部筆者)(1916年6月3日『琉球新報』3)

辻のジュリ(後述)が手切れ金の一部で蓄音器とレコードを購入し、沖縄音楽のレコードを1日中聴いていた記事である。1916年6月3日時点で購入できた沖縄音楽レコードは、1915年に大阪蓄音器が制作したSPに限定される。よって、確かにこのレコードが那覇市内で販売され、購入した人がいたことが判明した。

その大阪蓄音器は1912(大正元)年10月1日、実業家・樫尾長石衛門により大阪市南区長堀橋筋2丁目20番地に設立された。製品は「ナショナル・レコード」と称され、商標は「白熊印」であった。大阪蓄音器は徐々に経営を拡大したが、1917(大正6)年に京都の東洋蓄音器合資会社(オリエント・レコード)に併合され(横田1918年4月参照)、原盤のほとんどを移籍した(岡田1991年8月:120参照)。その後、1920(大正9)年7月1日に清算を結了している(山口1936:183)。岡田によると「ナショナル・レコードの発売総種類はそう多くなく、およそ200枚前後だと思われる」(岡田1991年8月:120)。なお、大阪蓄音器の活動については高橋2011を参照されたい。

表1は田辺文庫所蔵のSP6枚を凡例に沿ってまとめたものである。レコード番号の奇数は表面、偶数は裏面を示し、6枚共両面盤である。録音曲目は12曲、1作品である。《キザミ節》のみレーベルに「流行唄」と記載があるが、その他12曲にはジャンルの記載がない。凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典6曲、沖縄民謡4曲、八重山民謡2曲、歌劇1作品、となった。

歌手・演奏家として、古堅盛珍、高安朝常、城間恒有、安元詠勵、池宮城喜輝、屋良利禄、富原盛勇、宇利地小カメ、永村清浦が起用された。

岡田は大阪蓄音器のレーベルのデザインをタイプI～Vに分類している(岡田1991年8月:118-120)。だが、沖縄音楽SPはど

のタイプにも該当せず、特殊なデザインだといえる。レーベル地はオレンジ、レーベルの周囲は金色、文字は金、黒、白で2頭の白熊が巴紋を両側から支える図である。0-15～0-16、0-19～0-20、0-27～0-32はこのレーベルである。例として、写真1 富原盛勇『今帰仁 宮古ノ子』0-15、写真2 宇利地小カメ『八重山 恋の花節』0-28、写真3 永村清蒲『キザミ節』0-30を掲載する。

一方、屋良利禄『八重山 仲道節』0-23と池宮城喜輝『伊野波節』0-24はレーベル名がオリエント・レコードである。1917年に大阪蓄音器が東洋蓄音器に併合された後、今度は日本蓄音器商會が東洋蓄音器を買収し傘下に入れることに成功した(岡田1991年8月:122参照)。東洋蓄音器は日蓄京都工場となり、オリエントのレーベルは存続する(大西編2011:6参照)。つまり、大阪蓄音器の原盤を受け継ぎ、オリエントのレーベルを残したまま日本蓄音器商會により製造されたのが0-23と0-24である。

レーベルのデザインは薄緑色の地球儀の上にラクダが乗っている図で多色刷りである^り。このデザインは大阪蓄音器の地球儀に白熊が乗っている図を踏襲したものである。レーベルの周囲は金色、文字の色は「オリエント・レコード」が金、曲名と歌手名が黒、「ORIENT RECORD」「株式会社日本蓄音器商會」は紺である。例として、写真4 池宮城喜輝『伊野波節』0-24を掲載する。

オリエントが日本蓄音器商會の傘下にいた時代は1919(大正8)年から1928(昭和3)年である(岡田1991年8月:120参照)。よって、0-23と0-24は1919年～1928年に発売されたSPであろう。田辺は1922年沖繩調査の旅行記(高橋2017参照)で「オリエントでも近頃これを多数吹込んで居て、それを那覇市の森楽器店で売って居る」(田辺1923年2月:15)と記した。購入した中に、オリエント・レコードのSPが含まれていたため、「ナショナル」ではなく「オリエント」と記したのであろう。

また、池宮城喜輝『四季口説』0-20、池宮城喜輝『揚作田節』0-29、高安朝常『仲間節』0-32の音源は、2000年日本コロムビアが発売したCD『SP盤復元による沖繩音楽の精髓(上)』に収録済みである。また、永村清蒲『キザミ節』0-30もCD『SP盤復元による沖繩音楽の精髓(下)』に収録された。CD解説にレーベル名やレコード番号の記載はないが、田辺文庫のSPとCDを聴取、照合した結果、同じ音源であることが判明した。最古の沖繩音楽レコード音源は2000年に公開・発売されていたのである。なお、CD解説p.43にはSP盤提供者として、田辺尚雄の長男・秀雄の名前が記載されている。秀雄は2000年に日本コロムビアへSP音源を提供した後、2002年に沖繩県立芸術大学附属図書館へ寄贈したと推察される。

1.2 『白熊印ナショナルレコード音譜目録:1916年3月改版』による沖繩音楽SP全20枚

『白熊印ナショナルレコード音譜目録:1916年3月改版』「琉球新音譜」の欄には大阪蓄音器の自主制作SP全20枚(両面盤

のレコード番号、曲名、歌手・演奏家名が掲載された。表2『白熊印ナショナルレコード音譜目録』にみる沖繩音楽SPレコード(1915年録音)は本目録から沖繩音楽SP全20枚の情報を凡例に沿ってまとめたものである。録音曲目は39曲、5作品である。凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典24曲、沖繩民謡6曲、宮古民謡1曲、八重山民謡4曲、御座楽2曲、舞踊曲1曲、歌劇4作品、組踊1作品、不明1曲となった。

1.2.1 歌手・演奏家の経歴

歌手・演奏家として、古典〔安富祖流〕から金武良仁、古堅盛珍、古典〔野村流〕から高安朝常、我謝秀益、小橋川朝英、城間恒有、伊差川世瑞、安元詠勳、池宮城喜輝、饒平名光徳が参加した。御座楽は新垣平、民謡は主に富原盛勇と屋良利禄、歌劇は主に宇利地小カメ、小灣カマト、永村清蒲が担い、組踊は名嘉山亘と永村が担当した。

古典の演奏家たちと富原の経歴は高橋2011:231-232を参照されたい。古典〔野村流〕の演奏家8名は桑江良真の門下生(野村流音楽協会編1974:149参照)であり、池宮1987「写真:桑江良真師と弟子たち(明治45年2月)」には高安以外の7名が写っている。また、田辺は1922年沖繩調査の際、金武、古堅、高安、城間、伊差川、安元、饒平名と会い、彼らの演奏を鑑賞している。

高橋2011執筆時に不明だった永村、名嘉山、宇利地小の経歴がその後の調査によって判明した。1915年当時大阪蓄音器はどのような人々に録音を依頼したのか。特に民謡、歌劇、組踊に関する人選を探る上で、彼らの経歴は重要である。

(1) 永村清蒲

永村清蒲(愛称:永村フータイ)は明治・大正・昭和初期の沖繩芝居の世界で劇団・球陽座、中座などで活躍した喜劇俳優である。特に1911年以降は中座の7人組(新垣松含、伊良波尹吉、多嘉良朝成、吉元其康、永村清蒲、平良良仁、真境名安規)の一人として中心的な役割を果たした(池宮1975:230参照)。当時の沖繩芝居の俳優は琉球方言による台詞劇、歌劇、組踊などを演じていた。歌劇は歌、所作、舞踊、台詞等で組み立てられた歌舞劇である。琉球古典音楽や琉球舞踊を劇に織り込み、台詞に相当する歌は古典音楽や民謡のメロディーに新作の歌詞を乗せて歌い、物語を展開させた。歌劇の中で歌われた歌は沖繩の大衆から支持され、流行歌も生まれた。

永村が歌った《キザミ節》は俳優・伊良波尹吉(1886～1951)作の喜歌劇『キザミ節』の主題歌である。ターリー(土族のおやじ)、チル小(女性)、里主(旦那様)の掛け合いの場面であるが、SPでは永村1人で三役を演唱している(大城學2000:22参照)。

次に、中座時代の永村の活動について紹介する。1911(明治44)年「5月13日から…中略…20年ほど前の幻想的な新作舞踊『牡丹の精』を松含が新たに振り付け、永村清蒲が歌詞をつけ、上演

したところ当って6月16日まで上演された」(池宮 1975:230-231)。1913(大正2)年には組踊『二童敵討』で護佐丸の妻を演じた(1913年6月22日『沖縄毎日新聞』3)。中座の時代は他の劇団との競争が激しく、「多くの名作を生んでおり、そのかげには渡嘉敷守礼、永村清蒲、多嘉良朝成らのあいつぐ本土演劇の視察があり、これが大きな刺激となっていた」(矢野 1993:306)。本土演劇の視察の成果として、1917(大正6)年と1918(大正9)年の新春初芸題披露では『仮名手本忠臣蔵』を上演し、永村が鷺坂伴内役を演じた記録がある(1917年1月3日『琉球新報』5)(1918年1月3日『琉球新報』4)。

また、1927年に大阪で沖縄音楽専門のマルフク・レコードを設立した普久原朝喜は、レコードから聴こえる永村の歌声から多大な影響を受けた一人である。普久原は「仲村フータイ(筆者注:永村清蒲)さんの『スーヤ(筆者注:塩屋)スーパー』、富原盛

勇さんの『ナークンニー(筆者注:宮古ノ子)』に接し、特に大先輩の富原盛勇さんのナークンニーにはすっかり惚れ込んでしまった。さっそく、松の枝をサオに缶詰ガラーを胴にした三線をつくって、練習をはじめたほどです」(普久原 1975年6月:31)と述べている。つまり、永村や富原のレコード聴取の体験が普久原を三線製作、民謡歌唱へと駆り立て、レコード会社の設立へと導いた。そして、1930年代初期には永村をマルフク・レコードに招き、『漫談 塩家のパーパー』『歌劇 農村早起唄』²⁾《花風節》《高離り》を録音、発売している。

なお、永村は1926年内外蓄音器商会(1924年兵庫県武庫郡今津町川内で設立)でSP『コティ節』S-135(平良雄一、胡弓:永村清蒲、笛:中村寛明)、SP『子持節・揚竹田節』S-144(平良雄一、胡弓:永村清蒲、笛:中村寛明)を録音しており、他の曲目には普久原も参加していた(高橋 2012b 参照)。



写真1 富原盛勇『今帰仁 宮古ノ子』ナショナル:0-15



写真3 永村清蒲『キザミ節』ナショナル:0-30



写真2 宇利地小カメ『八重山 恋の花節』
ナショナル:0-28



写真4 池宮城喜輝『伊野波節』オリエン:0-24

表1 大阪蓄音器SPレコード目録(沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵) 作成：高橋美樹

請求記号	曲名	歌手・演奏者	レコード番号	記載ジャンル	分析ジャンル	レーベル	レーベル紙/文字	製造元	推定発売年	備考
田辺306	今帰仁 宮古ノ子	富原盛勇	0 15	記載なし	沖縄民謡	ナシヨナル	オレンジ/金・黒・白	OSAKA PHONOGRAPH	1915年	白熊
田辺306	辺野喜節	古堅盛珍	0 16	記載なし	古典	ナシヨナル	オレンジ/金・黒・白	OSAKA PHONOGRAPH	1915年	白熊
田辺307	子持節	三味線・笛/安元詠勳	0 19	記載なし	古典	ナシヨナル	オレンジ/金・黒・白	OSAKA PHONOGRAPH	1915年	白熊/レーベル記載は「小持節」
田辺307	四季口説	三味線・笛/池宮城喜輝	0 20	記載なし	沖縄民謡	ナシヨナル	オレンジ/金・黒・白	OSAKA PHONOGRAPH	1915年	白熊/CD『沖縄音楽の精髓(上)』Disc-2-19
田辺308	踊クワデイサ節	三味線・笛/城間恒有	0 27	記載なし	古典	ナシヨナル	オレンジ/金・黒・白	OSAKA PHONOGRAPH	1915年	白熊
田辺308	八重山 恋の花節	宇利地小カメ	0 28	記載なし	八重山民謡	ナシヨナル	オレンジ/金・黒・白	OSAKA PHONOGRAPH	1915年	白熊
田辺309	揚作田節	三味線・胡弓/池宮城喜輝	0 29	記載なし	古典	ナシヨナル	オレンジ/金・黒・白	OSAKA PHONOGRAPH	1915年	白熊/CD『沖縄音楽の精髓(上)』Disc-2-18
田辺309	キザミ節	永村清蒲	0 30	流行唄	歌劇	ナシヨナル	オレンジ/金・黒・白	OSAKA PHONOGRAPH	1915年	白熊/CD『沖縄音楽の精髓(下)』Disc-1-13
田辺310	手間当/カナヨ一節	富原盛勇	0 31	記載なし	沖縄民謡/沖縄民謡	ナシヨナル	オレンジ/金・黒・白	OSAKA PHONOGRAPH	1915年	白熊
田辺310	仲間節	高安朝常	0 32	記載なし	古典	ナシヨナル	オレンジ/金・黒・白	OSAKA PHONOGRAPH	1915年	白熊/CD『沖縄音楽の精髓(上)』Disc-2-20
田辺325	八重山 仲道節	屋良利禄	0 23	記載なし	八重山民謡	オリエント	多色/金・黒・紺	日本蓄音器商会	—	ラクダ
田辺325	伊野波節	池宮城喜輝	0 24	記載なし	古典	オリエント	多色/金・黒・紺	日本蓄音器商会	—	ラクダ

● 琉球新音譜

○一	○二	○三	○四	○五	○六	○七	○八	○九	○一〇	○一一	○一二	○一三	○一四	○一五	○一六	○一七	○一八	○一九	○二〇	○二一	○二二	○二三	○二四	○二五	○二六	○二七	○二八	○二九	○三〇	○三一	○三二	○三三	○三四	○三五	○三六	○三七	○三八	○三九	○四〇	○四一	○四二	○四三	○四四	○四五	○四六	○四七	○四八	○四九	○五〇	○五一	○五二	○五三	○五四	○五五	○五六	○五七	○五八	○五九	○六〇	○六一	○六二	○六三	○六四	○六五	○六六	○六七	○六八	○六九	○七〇	○七一	○七二	○七三	○七四	○七五	○七六	○七七	○七八	○七九	○八〇	○八一	○八二	○八三	○八四	○八五	○八六	○八七	○八八	○八九	○九〇	○九一	○九二	○九三	○九四	○九五	○九六	○九七	○九八	○九九	○一〇〇
----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------

大正五年三月改版

図1 『白熊印ナシヨナルレコード音譜目録:1916年3月改版』 沖縄関連のみ抜粋(提供:大西秀紀)

表2 『白熊印ナショナルレコード音譜目録』にみる沖縄音楽SPレコード(1915年録音)

作成:高橋美樹

請求記号	曲名	歌手・演奏者	レコード番号	記載ジャンル	分析ジャンル
	御座楽	サウシ/新垣平	0 01		御座楽
	御前風	三味線・胡弓/伊差川世瑞	0 02		古典
	上り口説	三味線・笛/屋良利禄	0 03		沖縄民謡
	下り口説	三味線・胡弓/池宮城喜輝	0 04		沖縄民謡
	干瀬節典/述懐	高安朝常	0 05		古典/古典
	干瀬節(明笛)	饒平名光徳	0 06		古典
	宇地泊節典/揚タカニク節	三味線・笛/伊差川世瑞	0 07		古典/古典
	茶売節	宇利地小カメ	0 08		歌劇
	宮子ノアヤグ(トーカニ節)	三味線・笛・胡弓/富原盛勇	0 09		宮古民謡
	揚七尺節/サアサア節	安元詠勵	0 10		古典/古典
	主と妻節	宇利地小カメ	0 11		歌劇
	与那原節典/立雲節	池宮城喜輝	0 12		古典/古典
	村原のヒャー(組踊)泊の場(上)	名嘉山亘	0 13		組踊
	村原のヒャー(組踊)泊の場(下)	名嘉山亘	0 14		組踊
田辺306	今帰仁 宮古ノ子	富原盛勇	0 15	記載なし	沖縄民謡
田辺306	辺野喜節	古堅盛珍	0 16	記載なし	古典
	ムンジユル節	小灣カマト	0 17		古典
	散山節	三味線・笛/我謝秀盛	0 18		古典
田辺307	子持節	三味線・笛/安元詠勵	0 19	記載なし	古典
田辺307	四季口説	三味線・笛/池宮城喜輝	0 20	記載なし	沖縄民謡
	湊原節	三味線・笛/小橋川朝英	0 21		古典
	八重山 小浜節	三味線・笛・胡弓/屋良利禄	0 22		古典
田辺325	八重山 仲道節	屋良利禄	0 23	記載なし	八重山民謡
田辺325	伊野波節	池宮城喜輝	0 24	記載なし	古典
	姉妹敵討	名嘉山亘, 永村清蒲	0 25		組踊
	散山節	高安朝常	0 26		古典
田辺308	踊クワゲイサ節	三味線・笛/城間恒有	0 27	記載なし	古典
田辺308	八重山 恋の花節	宇利地小カメ	0 28	記載なし	八重山民謡
田辺309	揚作田節	三味線・胡弓/池宮城喜輝	0 29	記載なし	古典
田辺309	キザミ節	永村清蒲	0 30	流行唄	歌劇
田辺310	手間当典/カナヨー節	富原盛勇	0 31	記載なし	沖縄民謡/沖縄民謡
田辺310	仲間節	高安朝常	0 32	記載なし	古典
	平敷節	高安朝常	0 33		古典
	黒島口説	小灣カマト	0 34		八重山民謡
	センスル節	小灣カマト	0 35		歌劇
	八重山 安里屋節	屋良利禄	0 36		八重山民謡
	スワイフシン 御座楽	サウシ/新垣平	0 37		御座楽
	述懐節	三味線・胡弓/伊差川世瑞	0 38		古典
	干瀬節	高安朝常	0 39		古典
	仲竹田節典/浜千鳥節	金武良仁	0 40		不明典/舞踊曲

(2) 名嘉山亘

名嘉山亘は沖縄芝居の俳優であり、1906(明治39)年4月6日～17日に球陽座の一員として出演した記事(1906年4月6日『琉球新報』3)がある。組踊『姉妹敵討』0-25は名嘉山と永村で録音された。さらに、名嘉山が録音した『村原のヒャー／組踊 泊の場』0-13/0-14とは組踊『大川敵討』を指し、別名『忠孝婦人』『村原』とも呼ばれる。組踊は「18世紀初めに沖縄で創始され、今日まで傳承されている楽劇」(當間2019)である。一方、「沖縄における商業演劇は、廃藩置県によって家禄を失った宮廷芸能家が仮小屋で興行したのがはじまりで、そのため組踊を含めた宮廷芸能は商業演劇の役者たちによって受け継がれていった」(清村2008:520)。そのため、永村や名嘉山など沖縄芝居の俳優たちも組踊を演じるようになり、1915年のレコーディングでも組踊を録音する人物として名前が挙がったと推察される。

(3) 宇利地小カメ〈恋の花カメ〉

宇利地小カメは那覇の辻遊廓で民謡《恋の花節》を歌うジュリとして名を馳せた人物である。ジュリとは沖縄における遊女、娼妓を指す言葉であり、「尾類」の字をあてることもある(高良2019参照)。「宇利地」は妓楼の名前である。辻遊廓は1944年に空襲で焼失するまで「政界や商工会などの社交場として栄え」(塩月2008:534)、また、沖縄県外から来島する人々を接待する場でもあった。1922年田辺が沖縄調査に訪れた際も、辻の「梅の屋」「末広亭」「新屋」で歓迎会などを催し、琉球舞踊、古典音楽、箏の演奏を鑑賞している(田辺1923a年1月、田辺1923b年2月、田辺1968、高橋2017:156参照)。

1914(大正3)年～1916(大正5)年の『琉球新報』には宇利地小カメに関する記事が数件掲載されている。中でも、『恋の花小』と云えば、アノ42階の宇利地のカミー小かと大方の粹人様は首を縦に振らるる(1914年4月16日『琉球新報』3)と記された。1914年8月8日『琉球新報』には「宇利地小の恋の花カメ小の特意の美音が此の程トンと聞かぬ」という記事が掲載されるほど、カメの歌声は沖縄で広く知られていた。

渡嘉敷錦水は〈恋の花カメ〉について、次のように述べた。

『庭や雪降ゆい梅や花咲ちゆい、無蔵が懐や真南風ど吹ちゆる』と寂のある懐かしい歌声が典雅な三味線の音色と共に後道天使館小路角の小湾の二階から聞こえる。ゾロゾロ通る遊治郎たちの足が釘づけされたようにピタリと立ちどまる。宇利地小のカメが喉をしばって歌う得意の『恋の花節』である。恋の神秘境に『恋の花節』を唄う彼女の艶名は瞬く間に通人たちの間に持て囃され引っぱり風の有様であり『恋の花カメ』と云えば誰知らぬ者なき迄の唄い女となったのである。間もなく落籍されて大阪に赴き料亭を営み気が向くと首取った杵づかの声自慢で『恋の花節』を唄い客をして南島に遊ぶ思いあらしめると云う。(下

下線部筆者)(渡嘉敷1949:227-228)

上記にあるように、〈恋の花カメ〉の知名度の高さが、大阪蓄音器で《恋の花節》を録音するに至った。

太田・佐久田編1984『沖縄の遊郭』には三線、箏、胡弓、太鼓、バイオリンなどを嗜むジュリの記事が多数掲載されている。琉球王国時代の御冠船芸能を引き継いだ俳優・舞踊の師匠たち(玉城盛重、玉城盛義、渡嘉敷守良、新垣松合)は辻を滋養の場とした(浅香2014:92参照)。ジュリは「妓楼をあげて、御冠船芸能に携わった御殿たちやその後継者である明治の名人上手の師匠たちから舞踊、音楽、組踊まで習い受けたという」(浅香2014:92)。カメも師匠たちから技芸を習い受けたと推察され、民謡に留まらない幅広いレパートリーを備えた人物であった。

カメが選曲した《茶売節》は、沖縄初期の歌劇『茶売やあ』で歌われた楽曲である。渡嘉敷守儀(1870—1899)作の歌劇『茶売やあ』は全体がほぼ3つの場面にわけられるが、《茶売節》という1つの曲でとおされていることに特徴がある(矢野1993:269参照)。「同一メロディのくりかえしによって筋をはこんで行く構成」(矢野1993:269)である。

また、《主と妻節》は同じく渡嘉敷守儀作の歌劇『主ん妻』の主題歌である。歌劇『主ん妻』は「1887年(明治20)ごろの喜歌劇の初期の作」(那覇出版社編集部編1992:436)であり、当時沖縄で人気を博した作品であった。

カメはその後、大阪へ渡っている³⁾。1939b年10月1日『大阪球陽新報』4には尼崎市で南月亭(尼崎市長洲大門町53)を営業した時の広告が掲載され、「営業者 恋の花カメ」とある。さらに、同広告には「恋の花カメが一世一代の記念吹込み／南月商会」という見出しとともに、「南国レコード界に再出現／沖縄レコード界に断然人気爆発す」とある。カメのレコードを製造販売したのは南月商会の経営者・山田新晶であり「丸山印南国レコード」と銘打っていた。つまり、山田は南月亭と丸山印南国レコードを経営していた人物である。〈恋の花カメ〉のレコード発売に関する読者の反応について、次の記事が掲載された。

本紙に恋の花カメが再びレコード界に現れると報道されるや俄然人気を呼びその反響は同女が嘗つて流転の生活を送っていた宮古の民友新聞にまで取沙汰されるようになり当の南月商会にはレコード購入希望者がワンサと押しかけ忽ち売切れとなり昨今では断るのに困っている状態である…後略…(下線部筆者)(1939a年10月1日『大阪球陽新報』3)

「恋の花カメが再びレコード界に現れる」という文言からは、1939年以前にもカメがレコードを発売していたことがわかる。後述するトモエ・レコードでも、カメは録音していた。1928年9月7日『沖縄昭和新聞』3には自声堂楽器部によるトモエ・レ

コードの広告が掲載され、録音者の中に、永村清蒲、宇利地小カメ、小湾カマドの3名も含まれている。だが、田辺文庫 SP や沖縄県立図書館所蔵トモエ・レコード目録には3名の名前や録音曲の記載が見当たらず、詳細は不明である。

2. 日本蓄音器商会制作・沖縄音楽 SP レコード

田辺文庫には日本蓄音器商会(東京)が制作した SP レコード 6枚(テスト盤)が所蔵されている。さらに、『鷺印レコード新曲目』【田辺 268-4】と題された文字資料も紙媒体で所蔵がある。レイアウトを見る限り、レコード会社が販売用に作成した目録ではない。ただし、SPの曲名、歌手・演奏家、レコード番号が記録されており、極めて貴重である。2では田辺文庫所蔵 SP について整理した後、『鷺印レコード新曲目』の情報を基に日本蓄音器商会制作の沖縄音楽 SP レコードの実態について整理する。

2.1 田辺文庫所蔵：日本蓄音器商会制作・沖縄音楽 SP レコード 6枚

初めに、日本蓄音器商会について説明する。ホーン商会の代表 F・W・ホーンが東京に「1907(明治40)年、日本で最初の蓄音機とレコードの製造・制作会社、日米蓄音機株式会社を設立する。…中略…3年後の1910(明治43)年には日本蓄音器商会を設立」(生明 2016:79)したが、「明治45年には日米蓄音器株式会社を日本蓄音器商会に吸収して一本化する」(生明 2016:79)。蓄音機は「ニッポノホン」という商標で製造・販売した。レコードは1915年「片面盤をすべて回収・廃棄し、製品を両面盤へ切り替え。同時に日米蓄音機時代からのシンフォニー、ローヤル、グローブ、アメリカン、ユニバーサルの5種のレーベルを廃止し、再発・新譜のすべてをニッポノホン(ワシ印)に統一」(大西編 2011:6)した。「以来、ニッポノホンは『ワシ印』の愛称で全国津々浦々まで知れ渡る大正期を代表する大レーベルへと成長していった」(岡田 1991年7月:116)。なお、日本蓄音器商会は1928年に設立された日本コロムビア株式会社の前身である。

2.1.1 テスト盤

田辺文庫所蔵の日本蓄音器商会 SP は商品として流通した販売用レコードではない。レーベルには白い紙が貼られ、ニッポノホン(ワシ印)のデザインが反転した形で透けて見える。つまり、ニッポノホンのレーベル紙を裏返して使用したのである。

また、レコード番号、曲名、歌手・演奏家の名前はレーベルに手書きで記入してある。さらに、レコード内周の無音溝の部分にはレコード番号と実用新案番号が刻印されている。例えば、『琉球カチャーシー(本調子)』レコード番号:6503の場合、「第31463号 実用新案登録 第41297号 不許複製 6503」という文字が確認できる(写真5参照)。大西秀紀氏の御教示によると、これらの番号の刻印があれば間違いなく正規品であるとい

う。以上の情報から、筆者は田辺文庫所蔵の日本蓄音器商会 SP を「テスト盤」だと判断した。

テスト盤について岡田は次のように解説している。

テスト盤は吹き込んだ原盤を製品として発売する前の段階で、試聴するためにプレスした盤である。普通、SP盤の録音はワックス原盤を用い、複数枚を録音する。その中の本命盤からスタンパーを起こし、テスト用の盤を3枚から5枚くらい作る。これがテスト盤で、流行歌ならば文芸部の担当者、営業部、作詞・作曲家、吹込み技術者らが試聴し、問題がなければ発売の運びとなる。(岡田 2016年7月:170)

発売前に田辺が試聴していたのかは不明である。だが、制作側がテスト盤を試聴する際、『鷺印レコード新曲目』に記載された基本情報は必要である。つまり、テスト盤と『鷺印レコード新曲目』を田辺はセットで所持していたと考えられる。また、田辺は1922年沖縄調査の旅行記に「琉球音楽のレコードは日本蓄音器商会にもあるし」(田辺 1923年2月:15)と記し、日本蓄音器商会制作の沖縄音楽レコードの存在を知っていた。

2.1.2 発売年を「1917年」とする根拠

次に、日本蓄音器商会 SP の発売年について述べる。レーベルと『鷺印レコード新曲目』には発売年が記載されていない。『ワシ印レコード総目録:ニッポノホン』など当時のレコード目録や月報にも、沖縄音楽 SP に関する記載はない。しかし、沖縄県内の新聞『琉球新報』には下記の広告・記事が掲載されていた。

急 告

第2回吹込琉球新音譜着荷

但シ専売特許盤 大売出し

◎音声明瞭ニシテ尤モ高声ヲ発スルハ本品ノ特長

◎使用回数モ普通盤ノ約3倍使用ニ堪ユ

部数ニ限りアリ至急御用命アリタシ

蓄音器世界ノ霸王タル日本蓄音器商会 特約店

〈モ 和洋楽器商 森楽器店 電話 272 番

(下線部筆者)(1917年4月16日『琉球新報』)

上記の広告により、SPが「日本蓄音器商会 特約店」である森楽器店に入荷したことがわかる。「第2回吹込琉球新音譜着荷」とあるが、「第1回吹込」とは2で述べた1915年大阪蓄音器制作 SP のことを指す。「専売特許盤」とは森楽器店のみで販売することを許可した SP という意味であろう。第2回吹込 SP も第1回と同様、森楽器店で販売された。ただし、森楽器店がどのくらい制作費や人選、選曲に関与していたかは不明である。

第2回 SP の販売状況について、下記の記事が伝えている。

●琉球音譜到着

区内石門通り森楽器店の第2回琉球音譜は此程着荷 直ちに発売したるが音声は第1回の音譜より良好にて殊に『親アンマー』節の如きは買手者多く全く売切れの姿なりと云ふ。(1917年4月29日『琉球新報』)

第2回SPの音声は第1回SPよりも良好であり、『親アンマー』収録SPを購入する人々が多く、売切れの様相を呈していることが記された。『親アンマー』は(一)～(四)SP2枚(両面盤)に収録され、レコード番号:6500～6501、6520～6521で発売された。歌劇『親アンマー』は「1888年(明治21)ごろにできた初期の琉球歌劇で…中略…明治20年代の半ばごろは盛んに上演されていた」(那覇出版社編集部編 1992:435)。この歌劇は「首里王府から八重山に派遣された八重山在番役人と(筆者注:親アンマー=在任中の現地妻)の間に子供が生まれるが、在番役人の任期が明けて首里へ帰る役人と別れなければならない。このときの親アンマーの悲劇を描いた」(那覇出版社編集部編 1992:435)。数多くの上演を重ね、観客の共感を得た物語であるため、そのSPを買い求める人々の姿は容易に想像がつく。人気を博した歌劇がレコードという録音メディアにのって、再現されたのである。

SPは「日本蓄音器商会 特約店」の森楽器店で専売特許盤として販売された。さらに、田辺文庫SPと『鷺印レコード新曲目』双方に『親アンマー』が収録されている。この2点を根拠に、SPは1917(大正6)年に発売されたと判断した。

では、なぜ日本蓄音器商会は1917年に沖縄音楽SPを制作したのであろうか。

『日蓄(コロムビア)三十年史』には「法の不備に乗じ、またたくうちに東京・京都・静岡その他の土地に、雨後の筍の如く、多数の複写盤製造業者が続出し、安価なるレコードが、たちまち全国に氾濫し、遂に1枚50銭、更に下つては30銭の低廉なレコードが市場に現出した。株式会社日本蓄音器商会に受難の日が続いた」(日本蓄音器商会編 1940:24)とある。その後、打開策として、5種の商標を「ニッポノホン」に統一し、片面盤を両面盤へ改造するなどの対策を講じたが、「複写盤を市場から駆逐することは不可能であった。従って『ニッポノホン』レコードの売上は減退の一途を辿り、業績は遅々として一向に振わなかった」(日本蓄音器商会編 1940:26)。結局、レコードを小売定価の半額で提供するという奇策を講じた。1916年11月7日『朝日新聞』1の広告では、「ニッポノホン鷺印両面盤定価の5割引で買える」と銘打ち、定価1円50銭の商品を75銭で販売する告知をした。5割引を実施した期間は1916年10月から1917年9月まで⁴⁾の1年間であった(倉田 1979:202 参照)。「この破天荒の犠牲打は因に当り、その年末にはレコードの売行が倍額となり、その翌年(筆者注:1917年)の初めには3倍に殖える好結果がもたらされ

た」(日本蓄音器商会編 1940:27)。

倉田は「どん底に落ち込んだ日蓄が、脱出するための努力」(倉田 1979:202)として、1917年の記録から下記を挙げている。

- ・6月 尺八「若葉」中尾都山 一関西を制覇した都山流初代家元のレコードで、販路を広げようとする。義太夫「伊賀越」豊竹古朝太夫 一のちの山城少掾。日蓄第一回の吹き込み。
- ・7月 八木節「天狗小僧」堀込源太 一八木節を考案し、大流行させた人物。
- ・8月 鳴物入り義太夫「千本桜道行」竹本鏝太夫ほか 一多数の録音が至難であった時代、ミキシング技術の向上を示す鳴物入りレコードは画期的な吹き込みであった。
- ・9月 モーターのねじを一度巻くと、4枚か5枚のレコードが聴けるユーホン(40円)を発売⁵⁾。(倉田 1979:202-203)

尺八演奏の大家・中尾都山や各地の民謡を録音した堀込源太を起用するとともに、新しい録音・再生技術に果敢に挑戦する姿勢が浮かび上がる。沖縄音楽SPは業績の回復を多方面で画策していた時期に制作された。どこでレコーディングが実施されたかは不明だが、東京だと歌手・演奏家らの旅費が高額になり、沖縄だと東京から派遣する録音技師などの費用が高額になる。初めての試みで利益が出る保証はどこにもないのだが、ある意味なりふり構わず多様なアプローチで打開策を探っていた時期だからこそ、沖縄音楽のレコード化に挑んだともいえる。

2.1.3 田辺文庫所蔵SP6枚

表3は田辺文庫SP6枚を凡例に沿ってまとめたものである。6枚共両面盤であり、レコード番号は「6502」のみ記載がある。ジャンル名の記載はない。録音曲目は12曲、1作品である。凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典2曲、沖縄民謡10曲、歌劇1作品となった。歌手・演奏家として、嘉手納良芳、新垣朝盛、前田ウサ小が起用された。新垣朝盛『碁打口説』6502(写真6参照)の音源は、CD『SP盤復元による沖縄音楽の精髓(下)』に収録されている。CD解説にも「4.碁打口説(ぐーうちくどうち)(4分5秒)/ニッポノホン6502」と記載がある。田辺文庫のSPとCDを聴取、照合した結果、同じ音源であることが判明した。前項と同様、田辺秀雄が日本コロムビアへSP音源を提供した後、沖縄県立芸術大学附属図書館へ寄贈したと推察される。

2.2 『鷺印レコード新曲目』による沖縄音楽SP全11枚

『鷺印レコード新曲目』【田辺 268-4】にはSP11枚(両面盤)の「主要楽器蛇三味線ト太鼓」という記述とともに、曲名、歌手・演奏家、レコード番号の情報が記されている。表4は『鷺印レコード新曲目』の情報を凡例に沿ってまとめたものである。レコード番号6500～6521⁶⁾の録音曲目は24曲、1作品、1芸能である。

凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典 3 曲、沖縄民謡 17 曲、奄美民謡 1 曲、舞踊曲 1 曲、歌劇 1 作品、芸能 1、不明 2 曲となった。

2.2.1 歌手・演奏家の経歴

歌手・演奏家は 2.1.3 と同じく、嘉手納良芳、新垣朝盛、前田ウサ小が担っている

嘉手納良芳(1882-1945)⁷⁾は明治中期から昭和 20 年まで、沖縄演劇の世界で球陽座、珊瑚座などに所属し、俳優や地謡として活躍した人物である。特に、球陽座時代は前述の永村清蒲や名嘉山亘らと共に数々の芝居を上演した⁸⁾。

仲井真元楷は嘉手納良芳を次のように評している。

(筆者注:良芳の)兄の良知文は、地謡としては天才的に抜群で、数ある芝居の地謡で、頭角をあらわして、すばらしい人であった…中略…明治以降の沖縄演劇は、新しい歌劇と新舞踊の創作が盛んであったので、りっぱな地謡がいないとよい舞台が見せられなかった。良芳丈もすぐれた兄良知文の感化を受けて、琉球音楽の地謡の技術を身につけ、俳優と地謡の二道を歩いていた得難い人であった…中略…明治の中期から、音楽、舞踊、組踊、歌劇と沖縄演劇のすべてをばまスターしているのので、いわば、沖縄演劇の百科事典的な存在であった。(下線部筆者)(仲井真 1965 年 6 月 6 日:12)

嘉手納の俳優及び地謡としての経験の豊富さは、数々の沖縄民謡や歌劇『親アンマー』を録音したことに表れている。『琉球歌劇』は役者がセリフを歌にのせてうたい、所作は舞踊になるが、『親アンマー』では歌はすべて地方(筆者注:地謡)が歌い、役者は歌に合わせて演技をするだけ。(当てぶり)である(那覇出版社編集部編 1992:435)。しかも、『親アンマー』は在番奉行、船頭、下男の三役を歌い分けなければならず、地謡としての力量が問われる。嘉手納は『親アンマー』を初め数々の歌劇の地謡としての経験が認められ、日本蓄音器商会の SP 録音者に選ばれたと推察する。なお、嘉手納は昭和初期にアサヒ蓄音器商会における琉球ツル・レコードでも録音している。日本蓄音器でも選曲した『今年前田節』他、『碁打口説』を富原盛勇と歌うなど数曲を録音した。

新垣朝盛の経歴は不明だが、古典、沖縄民謡、奄美民謡、舞踊曲、歌劇、京太郎(チョンダラー)⁹⁾という芸能まで幅広いレパートリーを録音した実績から、嘉手納と同様、俳優や地謡として活躍した人物ではないかと推察される。

前田ウサ小の経歴も不明である。ただ、下記の記事に「ウサ小」という名が確認できる。

7、8 年前中道の渡名喜に当時流行児として唄われて今年 25 の年

を迎えたウサ小とて顔は十人並で芸と来ては琴 三味線 胡弓 バイオリンに長じ、□て加えて歌もよく出来る妓で 7 月頃 前之毛 伊保(筆者注:妓楼名)に返り咲きして居るがウサ小は元馴染みと遊芸趣味の客を歓迎するそう(辻町小僧)。(下線部筆者)(1916 年 10 月 13 日『琉球新報』3)

太田・佐久田編 1984 によると、大正時代にウサ小という名前の女性は数多く存在しており、上記が録音したウサ小に関する記事だとは断定できない。ただ、辻において歌や楽器に長けた女性を人選することは、当時の世相を踏まえると妥当である。1917 年 4 月に SP が発売されており、逆算すると録音は 1916 年末から 1917 年初めにかけて実施されたと推察される。1916 年 10 月 13 日に『琉球新報』に掲載されたウサ小の評判を受け、SP の録音者に抜擢されたとも考えられる。

2.3 田辺尚雄 1930 年三越「琉球展覧会」に SP 出品

1930 年 1 月 20 日～28 日東京日本橋の三越において「琉球展覧会」が開催された。1930 年 1 月 20 日『読売新聞』夕刊:1 の広告には「南海の彼方に暖い陽を受けて、古来特異の発達を示してまいりました琉球の歴史や風俗を各種の実物、絵画、写真、及び人形応用の美しい場面等によって現すと共に、独特の美術工芸品類をも展覧致します」とある。

三越編 1930『琉球展覧会目録』には伊波普猷、尚順男爵、東恩納寛惇、岩崎卓爾、伊藤忠太らから出品されたリストが掲載されている。田辺尚雄による出品は以下の通りである。

石垣島釣瓶 …中略…	1 個
麻白縞衣裳 …中略…	1 枚
黒島帯 里島織	1 本
琉球賀慶使略図	1 葉
琉球音楽教師写真	1 枚
<u>琉球音楽レコード</u>	<u>5 枚</u>
琉球蛇皮線	1 庭
琉球胡弓	1 庭(下線部筆者)(三越編 1930:18)

展示された「琉球音楽レコード 5 枚」の中に、新垣朝盛 SP 『碁打口説』6502、嘉手納良芳 SP 『チェ小チェ小ノケーヒ取ケーヒ取』6506(写真 7 参照)が含まれている。その根拠は上記 2 枚のレーベルに東京三越のシールが貼付されているからである。6506 のシールには「田辺尚雄様」 「24 6 共 5」と手書きで記されている。他の SP 3 枚の詳細は不明だが、田辺が日本蓄音器商会の SP 2 枚を 1930 年三越における「琉球展覧会」に出品し、展示されたことは間違いのないだろう。

表3 日本蓄音器商会SPレコード目録(沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵) 作成:高橋美樹

請求記号	曲名	歌手・演奏者	レコード番号	記載ジャンル	分析ジャンル	レーベル名	レーベル紙/文字色	製造元	推定発売年	備考
田辺300	親アンマー(一)			記載なし	歌劇	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺300	親アンマー(二)			記載なし	歌劇	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺301	今年前ノ田ノデンスナー	嘉手納良芳		記載なし	沖縄民謡/沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺301	琉球 十番口説	嘉手納良芳		記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺302	琉球 東風原口説	新垣朝盛		記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺302	百名節	前田ウサ小		記載なし	古典	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺303	チェ小エホ小/ケーヒ取ケーヒ取	嘉手納良芳		記載なし	沖縄民謡/沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺303	琉球 花風節	前田ウサ小		記載なし	古典(舞踊曲)	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺304	琉球 カチヤージ(本調子)	嘉手納良芳	6502	記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺304	琉球 津波口説	新垣朝盛	6502	記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤/ CD『沖縄音楽の精髓(下)』Disc-2-4
田辺305	琉球 津波口説	新垣朝盛		記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺305	ヤクザイ節	嘉手納良芳		記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤

表4 『鷲印レコード新曲目』にみる沖縄音楽SPレコード 作成:高橋美樹

請求記号	曲名	歌手・演奏者	レコード番号	記載ジャンル	分析ジャンル	レーベル名	レーベル紙/文字色	製造元	推定発売年	備考
田辺300	親アンマー(一)	新垣朝盛	6500	記載なし	歌劇	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺300	親アンマー(二)	嘉手納良芳	6501	記載なし	歌劇	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺304	基打口説	新垣朝盛	6502	記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤/ CD『沖縄音楽の精髓(下)』Disc-2-4
田辺304	琉球 カチヤージ(本調子)	嘉手納良芳	6503	記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺301	今年前ノ田ノデンスナー	嘉手納良芳	6504	記載なし	沖縄民謡/沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺301	琉球 十番口説	嘉手納良芳	6505	記載なし	沖縄民謡/沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺303	チェ小エホ小/ケーヒ取ケーヒ取	嘉手納良芳	6506	記載なし	沖縄民謡/沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺303	琉球 花風節	前田ウサ小	6507	記載なし	古典(舞踊曲)	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺305	琉球 津波口説	新垣朝盛	6508	記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺305	ヤクザイ節	嘉手納良芳	6509	記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺302	琉球 東風原口説	新垣朝盛	6510	記載なし	沖縄民謡	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
田辺302	百名節	前田ウサ小	6511	記載なし	古典	ニッポノホン	レーベル裏紙/手書き	日本蓄音器商会	1917年	テスト盤
	天川節	新垣朝盛	6512	記載なし	古典	ニッポノホン		日本蓄音器商会	1917年	
	前ノ浜ノ坂原口説	嘉手納良芳	6513	記載なし	沖縄民謡/沖縄民謡	ニッポノホン		日本蓄音器商会	1917年	
	花笠節/伊集ノガマク小一	前田ウサ小	6514	記載なし	沖縄民謡/沖縄民謡	ニッポノホン		日本蓄音器商会	1917年	
	牧港アン小一/サマイトサンセ	新垣朝盛	6515	記載なし	沖縄民謡/奄美民謡	ニッポノホン		日本蓄音器商会	1917年	
	北山崩/天願口説	嘉手納良芳	6516	記載なし	不明/沖縄民謡	ニッポノホン		日本蓄音器商会	1917年	
	ソイレブ節/八重山 クスブンギ	新垣朝盛	6517	記載なし	不明/沖縄民謡	ニッポノホン		日本蓄音器商会	1917年	
	京太郎	新垣朝盛	6518	記載なし	芸能	ニッポノホン		日本蓄音器商会	1917年	
	取納奉行	新垣朝盛	6519	記載なし	舞踊曲	ニッポノホン		日本蓄音器商会	1917年	
	親アンマー(三)	嘉手納良芳	6520	記載なし	歌劇	ニッポノホン		日本蓄音器商会	1917年	
	親アンマー(四)	嘉手納良芳	6521	記載なし	歌劇	ニッポノホン		日本蓄音器商会	1917年	

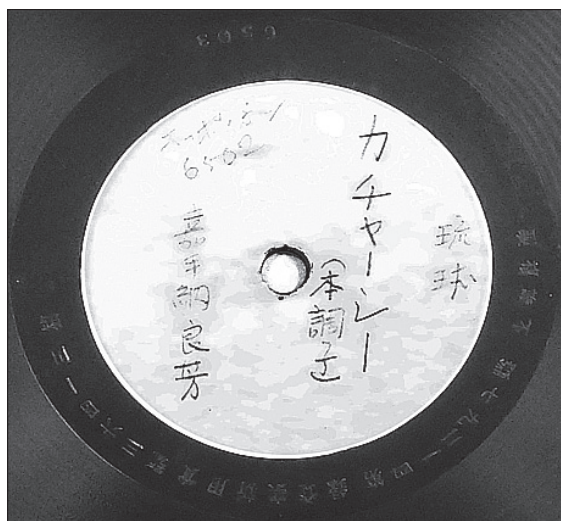


写真5 嘉手納良芳、SP『琉球カチャーシー(本調子)』
ニッポノホン:6503

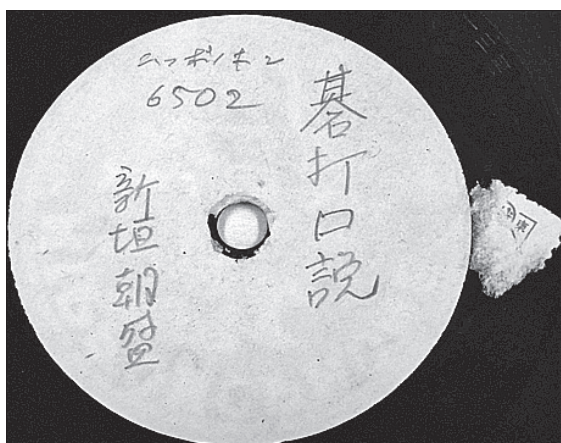


写真6 新垣朝盛、SP『碁打口説』ニッポノホン:6502

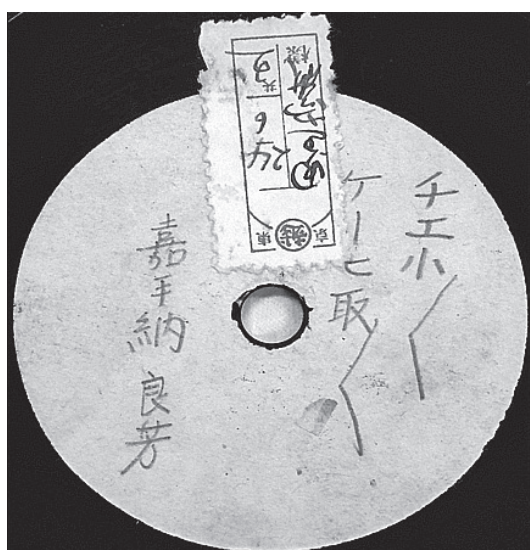


写真7 嘉手納良芳、SP『チェ小チェ小/ケーヒ取ケーヒ取』ニッポノホン:6506

3. ニッポン・レコード制作・沖縄音楽 SP レコード

田辺文庫にはニッポン・レコードが制作した SP レコード2枚が所蔵されている。この SP は琉球古典音楽演奏家・山内盛彬^{やまうちせいひん}(1890-1986)が「訳詩琉球民謡」を発表する一環として録音したものである。「訳詩琉球民謡」¹⁰⁾とは訳詩:佐藤惣之助¹¹⁾、編曲:山内玲光(筆者注:山内盛彬の別名)により行われた活動である。3では田辺文庫所蔵 SP について整理した後、山内による「訳詩琉球民謡」の試みとその公開方法について述べる。

3.1 田辺文庫所蔵:ニッポン・レコード制作・沖縄音楽 SP レコード2枚

初めに、ニッポン・レコードについて説明する。1928年4月東京市北豊島郡田端町字下田端1098に設立された「ニッポン吹込発声機合名会社」が同年8月10日に「ニッポンレコード合資会社」となった¹²⁾。「代表者は美野川潤三郎氏。この会社は、昭和7年(筆者注:1932年)まで存続、その後、同年に発足したオーゴン・レコード合資会社の母体となった」(岡田1992年5月:110)。岡田によると「ニッポン・レコードは、数少ない純粋の東京のレコード会社で、吹き込まれたものは下町っ子が好みそうな娯楽物が多かった。…中略…ニッポン・レコード製造のレコードは『トンボ印』のレーベルがメインで、ほかに『フタミ』と『ホーオー』があった」(岡田1992年5月:110-111)。沖縄音楽 SP 2枚はトンボ印のレーベルである。

なお、田辺は1929年～1930年頃、トンボ印ニッポン・レコードに委託し SP を制作していた¹³⁾。田辺は数多くのレコード会社と繋がりを持っていたが、ニッポン・レコードと田辺の関係が山内の SP 録音に何らかの影響を与えたと推察される。

3.2 田辺文庫所蔵 SP 2枚

表5は田辺文庫 SP 2枚を凡例に沿ってまとめたものである。2枚共両面盤であり、レコード番号は「15015-A」「15015-B」のみ記載がある。ジャンル名は「琉球新民謡」と記され、録音曲目は4曲である。凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、新民謡4曲となった。歌手・演奏家として、独唱:川平喜久子、蛇皮線:山内玲光、囃子鳴物連中と記載がある。川平喜久子(1906-1986)は沖縄出身の作曲家・金井喜久子の旧姓である。使用楽器は蛇皮線の他に「囃子鳴物連中」とあるが、SP を聴取した結果、三線、太鼓、笛、四つ竹、玲琴の音色を確認できた。つまり、この SP における「囃子鳴物連中」とは、太鼓、笛、四つ竹、玲琴を指すと思われる。なお、玲琴とは「低音の胡弓。木製台形の胴に棹をつけ、三弦を張ってチェロの弓で擦奏する。1922年ごろ、胡弓・チェロ・ラバープ・馬頭琴などをもとに、田辺尚雄が新考案」(2018『大辞林』第三版)した弦楽器である。

レーベルのデザインは黒地に金文字であり、レーベル名「トンボ印ニッポンレコード」、歌手・演奏家、曲名は縦書きに記され

た。岡田はトンボ印ニッポン・レコードのレーベルの種類を〔タイプ1-a〕～〔タイプ3-c〕に分けたが、沖縄音楽SPは〔タイプ2-a〕に属し、「このレーベルがスタンダード・タイプ。1枚80銭」（岡田1992年5月:111）だという。

また、『与那国小猫』15015-A、『奄美節』15015-B(写真8参照)のSPについて、山内は「ニッポンレコード会社から、昭和4年(筆者注:1929年)5月発売になって居る」と記した。ニッポン・レコードの目録を調査したところ、『昭和5年5月トンボ印ニッポンレコード新譜御案内』に15285～15305のSP情報が確認できた。よって、15015は1930年5月より前に発売されたことになる。また、『昭和7年正月トンボレコード新譜総目録』には『草津節/湯もみ唄』15017が掲載されており、15000番台が確実に市場に出回っていたことがわかる。

さらに、SP『網代小唄』15014-A(作詞:池野みち春、作曲:山内玲光)、SP『富士の初雪』15014-B(作詞:佐藤惣之助、作曲:山内玲光作曲)がニッポン・レコードから発売されており、15015-A、15015-Bと同じレーベル・デザインである¹⁴⁾。つまり、15014～15015の2枚は山内が演奏や作曲を担当し、佐藤惣之助が作詞・訳詩に携わったレコードだといえる。

山内が記した「1929年5月発売」はニッポン吹込発声機合名会社がニッポン・レコードへ改称した1928年8月以降であり、川平が1932年に結婚して金井姓となる(小林1999:292)前の時期に当たる。以上、レコード目録と川平の旧姓の時期と一致することから、このSPの発売時期を「1929年5月」とする。

レコード番号未記載の『四季』『取たる金は』(写真9参照)について、山内は「録音したがレコードは発売せず、会員組織にして頒布する計画」(山内1929年10月:8)と述べた。レコードは一般的に録音、製造後「文芸部の担当者、営業部、作詞・作曲家、吹込み技術者らが試聴し、問題がなければ発売の運びとなる」(岡田2016年7月:170)。だが、このSPは何らかの問題が発生し発売に至らなかった可能性が高い。その結果、「会員組織にして頒布する計画」へと変更せざるを得なかったのであろう。

3.3 歌手・演奏家の経歴

山内は琉球王国最後の国王・尚泰に仕えた祖父・山内盛熹から琉球の野村流、湛水流の三線を伝承した演奏家である(2016『日本人人名大辞典』参照)。沖縄音楽研究のバイオニアでもあり、田辺には1915年東洋音楽学校(東京音楽大学の前身)在学中から長きに亘り師事してきた。1922年田辺が沖縄調査の際も、山内は沖縄県から音楽・舞踊に関する説明役として任命された。

川平(金井)喜久子は1906年沖縄県平良市で生まれ、1927年沖縄県立第一高等女学校卒業後、中野音楽学校(日本音楽学校の前身)本科声楽科に入学した。SPが発売された1929年5月は川平が中野音楽学校3年生の時期に当たる。「1930年に同校を卒業するが、さらに東京に留まって音楽の勉強を続けるため、活動写真

館の歌手や大学のオーケストラ部の演奏会に出演して生活費を捻出していた」(小林録1999:292)。1932年に金井儼四郎と結婚後、1933年東京音楽学校選科作曲科に入学し、下総皖一、呉泰次郎に師事した。金井は「日本最初の女性作曲家としてデビュー。作曲の土台は沖縄の音楽にあり、いずれの作品も沖縄県の旋律や素材を用いている」(日外アソシエーツ編2004b)。作品にオペラ『沖縄物語』『交響組曲琉球の思い出』『琉球狂詩曲』などがあり、1971年には『じんじん』で日本レコード大賞童謡賞を受賞した。

3.4 山内盛彬による「訳詩琉球民謡」の試み

訳詩:佐藤惣之助、編曲:山内玲光により「訳詩琉球民謡」の活動は実施された。《奄美節》《四季》《杜の葛》《四季口説》《取たる金は》《与那国の小猫》《ほとま節》《とばらま節》全8曲の歌詞と解説が山内1929年10月:6-10に掲載されている。8曲は個々にラジオ放送、レコード制作・発売、三越「琉球展覧会」の演芸会、論文を通じて発表された。時系列にすると、下記①～⑤のようになる。3.4では「訳詩琉球民謡」の目的を確認した上で、全8曲個々の歌詞や発表方法について整理する。

- ①1927年8月13日:JOAK 東京「民謡の夕」琉球及八重山群島民謡
- ②1929年4月19日:午後8時35分:JOAK 東京、JOCK 名古屋、JOHK 仙台、JOGK 熊本、JOFK 広島、JOIK 札幌:「蛇味線歌謡曲」
- ③1929年5月:ニッポン・レコードからSP録音(4曲)、発売(2曲)【15051-A】【15051-B】
- ④山内伶晃(筆者注:山内盛彬の別号)1929年10月「放送と吹込を了べた訳詩琉球民謡」『民謡楽』6号、民謡楽社、pp.6-10。「訳詩琉球民謡」8曲の歌詞・解説を掲載。
- ⑤1930年1月20日～28日「琉球展覧会」(於:日本橋三越)演芸会「琉球民謡と舞踊」

3.4.1 「訳詩琉球民謡」試みの目的

山内は「訳詩琉球民謡」を試みた経緯を次のように述べている。

予は大正13年(筆者注:1924年)に上京して以来、東都に於て、琉球の音楽や民謡を屢々紹介した。放送に演芸に講演の実演に機会ある毎に出演して相当に効果を修めた。然るに茲に遺憾な事が1つある。それは聴衆が、発音の相違から来る歌詞の不可解の点である。それは無理もない事で、歌詞が解らなくては、外国の音楽を原歌のまま聴く様なもので、興味の半分は殺がれて了う事である。…中略…歌詞の不明から来る聴衆の不快には全く困った。如何にもして此の短所を補正しようと工夫を重ねた結果思い付いたのが、この訳詩民謡である。(下線部筆者)(山内1929年10月:6)

琉球古典音楽や沖縄民謡は琉球方言による歌詞で歌われるため、日本本土の人々は歌詞の意味を十分理解することができない。山内はラジオ放送や講演の場で演奏するなど、精力的に演奏活動を展開していたが、歌詞が理解できないことに起因する聴衆の不快を実感していた。この点を克服する手立てとして、「訳詩琉球民謡」に取り組むに至ったのである。

さらに、「民謡を琉球の一僻地に葬らないで広く本邦の民衆が味う事によって『時空的』により偉大に生きるのを目的としての計画である」（山内 1929 年 10 月:6）と述べた。琉球古典音楽や沖縄民謡を沖縄県一地域のものとして世間から覆い隠すのではなく、日本全国の人々がこれらの音楽を味わうことにより、時間と空間を超越して活かすことを目的とした。山内には全国の人々に沖縄の音楽を普及、浸透させたいという強い願いがあり、それを実現するためには大衆が理解できる言語に置き換えることが必要であった。

山内は「訳詩琉球民謡」の試みについて、「名句を拾集し大体の腹案をして、詩人の佐藤惣之助氏に願って訳して貰った。その訳し方には直訳もあり意訳もあり、又は全然創作的な所もあれば、又は文句はそのままで発音のみを正したのもある」（山内 1929 年 10 月:6）と解説した。歌詞に採用する琉歌は山内が選抜き、その後、詩人・佐藤惣之助に共通語訳を依頼したのである。

一方、山内は「之は詩よりも曲の紹介である。凡そ歌が詠まれて居る間は、全く文学的価値を持って居るが、さて之が謡われ且つ伴奏される事になると、音楽的価値が重大となって民衆の影響の範囲が広がる」（山内 1929 年 10 月:6）と述べた。歌詞の共通語訳に取り組み、聴衆が歌詞を理解することを目指したが、曲の紹介をより重視していた。その理由として、伴奏にのり歌われたメロディーは聴衆への影響範囲がより広がることを挙げた。そして「私は歌詞は改めたが音楽的に重大な使命を持つ曲には聊かも手を加えなかった」（山内 1929 年 10 月:6）と、曲（メロディー）を改変しなかったことを強調した。

3.4.2 「訳詩琉球民謡」8曲の紹介

(1) 《奄美節》

《奄美節》の歌詞は以下の通りである。

- 1、沖縄と鹿児島棧橋かけたいね、棧橋はとともならぬ飛行機飛ばしたい、アリヤ飛行機飛ばしたい。
- 2、鹿児島土産は紬のハンカチよ、土産は後にして便りをやってくれ、アリヤ便りをやってくれ。
- 3、カンテラつけて、提灯つけて波止場に迎ふとや、いとし殿御の船は何処迄来てるかね、アリヤ何処迄来てるかね、
- 4、船じゃ寒がる夜は夜で冷えまする、着せてやりたい妾(わたし)のこの小袖、アリヤ妾のこの小袖。

5、村1番なり島1番なり庄屋のあね娘、月を鏡にお化粧するとかや、アリヤお化粧するとかや。（山内 1929 年 10 月:7-8）

《奄美節》は鹿児島県徳之島の民謡《一切節(ちゅつきやりぶし)》を元歌とする。歌詞の「一、の下旬は、原歌は『船を通わす』だが『飛行機云々』に改め、4、は他府県の民謡が紛れ込んだもので、5、の下旬は佐藤氏の即興的創作」（山内 1929 年 10 月:8）で、それを山内が《奄美節》と改題した。また、歌い方について次のように述べている。

(男) a 鹿児島土産は b 紬のハンカチをよ

(男女) b アリヤ 紬のハンカチよ

(女) c 土産は後にして d 便りをやってくれ

(男女) d アリヤ 便りをやってくれ。

の様にする予定だったが(上句の後段は複唱が普通、男女交互は予の考)都合によって女のための唄にして「アリヤ紬のハンカチよ」の複唱を略した。(a~d は筆者)(山内 1929 年 10 月:8)

久万田晋によると「奄美の旋律の特徴として重要なのは、歌詞の後半部分が繰り返されており、それに対応する旋律型もほぼ同じ形の繰り返しとなることである。abcdcd や abcdecdd では1節の後半部分で反復され、abccdd では半節ごとの後半部分が繰り返される」（久万田 1993:25）。「上句の後段は複唱が普通」という文言から、山内は当初《一切節》の詞型 abccdd を踏襲し、歌詞のみ改変する予定であったことがわかる。そこには「男女(あるいは2組)が歌を掛け合うという奄美に支配的な演唱形式」（久万田 1993:25）を継承しようとする姿勢が伺える。しかし、何らかの理由により「(男女)b」の部分を省略するに至り、結果的に詞型は abccdd に変更された。

さらに、田辺文庫【田辺 189】には山内盛彬作と思われる6曲の手書き楽譜《奄美節》《四季》《杜の苺》《四季口説》《取ったる金は》《与那国の小猫》が所蔵されている。三線が上段、玲琴が下段に分けて記譜された《奄美節》の楽譜を確認すると、旋律型も abccdd であることが判明した。

仲宗根幸市によると、徳之島母間で《一切節》が歌われ出したのは「明治38年(1905年)頃だといわれている…中略…明治40年頃から母間の男女は各地に出稼ぎに出ており母間人の行くところ大島の全域、鹿児島、関西でも爆発的に広まっている」（仲宗根 1998:247-251）。その後、沖縄では三大歌劇の1つ『伊江島ハンド小』（1923年真境名由康作）の中で、「カナ兄小にすてられて、泣きぬれるハンド小を慰めるとこのマチ小との語らいに用いられた」（上原 1986:149-150）。《一切節》の編曲版が歌劇の名場面に採用されたことにより、「大正、昭和の初期に沖縄でも流行した」（仲宗根幸市 1998:251）。山内は《一切節》が奄美諸島や沖縄に限らず、鹿児島や関西でも流行していることに注

目し、選曲したと考えられる。

次に、公開・発表方法を整理する。

1929年4月19日 JOAK 東京他5局のラジオ放送で「蛇味線歌謡曲」と称し《奄美節》《四季》《杜の苺》《四季口説》《取つたる金は》《与那国の小猫》6曲が紹介された。「蛇味線歌謡曲」について「琉球地方の民謡や俗歌を佐藤惣之助氏が内地の言葉に訳したものを琉球出身の山内玲光氏が琉球の節を土台して新しく編曲したもの」(1929年4月19日『読売新聞』9)と解説がある。1929年4月に「蛇味線歌謡曲」と称した楽曲を、1929年10月の論文では「訳詩琉球民謡」と改称している。また、1929年4月19日『読売新聞』9では「佐藤惣之助:訳詞、山内玲光:編曲、唄:川平喜久子、蛇味線:沖野一郎、玲琴:田辺禎一、三味線:山内玲光、笛:三浦幸夫、太鼓:山口光輝、四ツ竹:原美津夫」と掲載された。同記事では「出演者の中で田辺禎一氏と山内玲光氏を除いた外は、全部初放送で何れも琉球出身の人達である」と解説がある。山内は本土在住の沖縄出身者に歌や演奏を依頼したのであろう。なお、田辺禎一とは田辺が新日本音楽の演奏家として録音・出演した際の別名である。

山内は「田辺先生の御出演には一同力強く感じた。玲琴は和音伴奏を作って奏したが、蛇味線や笛は大体メロディーと同形式の伴奏を弾いた」(山内1929年10月:7)と述べている。田辺は玲琴を演奏することにより、山内の「訳詩琉球民謡」の取り組みを後押ししたともいえる。

《奄美節》の歌唱は「唄:山内玲光、唄:川平喜久子」と記載された(1929年4月19日『読売新聞』9)。田辺文庫のSP『奄美節』15015-Bを聴取したが、川平1人で歌唱していた。よって、ラジオ放送とSPでは歌唱分担が異なっている。

また山内は「吹込では田辺先生は加入されず、玲琴は私が弾いが(ママ)、其他は放送と同じ」(山内1929年10月:7)と述べた。SPのレーベルには「独唱:川平喜久子、蛇皮線:山内玲光、囃子鳴物連中」とあるが、山内の言説通り、録音では山内が玲琴を演奏したとすれば、蛇皮線(三線)は別の人物が担当したことになる。ラジオ放送では沖野一郎も三線を担当しているため、実際は「独唱:川平喜久子、蛇皮線:沖野一郎、玲琴:山内玲光、囃子鳴物連中(太鼓、笛、四つ竹)」で録音した可能性がある。

1929年5月《奄美節》はニッポン・レコードからSPとして発売された。

1930年1月20日～28日東京日本橋の三越で開催された「琉球展覧会」では演芸会も上演された。三越編1930:42-43によると、第2回(1930年1月25日～28日)「琉球民謡と舞踊」にて、「番外 訳詩民謡 ちゅつきゃり節 山内すみ子 伴奏 玲琴 伊野伶晃」が歌われた。山内すみ子(本名:澄子、1924年生)は山内の五女、伊野伶晃は山内の別名である。

《ちゅつきゃり節》と題された訳詩民謡だが、歌詞は山内1929年10月:7-8の《奄美節》1～5とほぼ同一である。山内は不特

定多数の人々が集う三越の「琉球展覧会」でも訳詩民謡の上演を試み、普及に努めていたことが指摘できる。

以上、《奄美節》は②～⑤により発表された。

(2) 《四季》

《四季》について山内は「私が春(筆者注:夏)秋冬の歌詞を選定して四季と改題した…中略…これは明るい感じのする曲で、黒島節と称て居るのを見ると八重山産の曲かも知れない…中略…上下句同旋律であるから、曲は単調である」と述べた。《四季》【田辺189】の楽譜を確認したところ、雑踊「松竹梅鶴亀」の鶴亀の踊りで歌われる《黒島節》のメロディーを用いていた¹⁵⁾。つまり、山内選定による春夏秋冬の琉歌を佐藤が共通語訳し、歌詞とした。その歌詞を《黒島節》のメロディーにのせて編曲したのが《四季》である。

1929年4月19日 JOAK 東京他5局で放送された《四季》は「唄 川平喜久子」と記された(1929年4月19日『読売新聞』9)。山内は「レコードは発売せず、会員組織にして頒布する計画」(山内1929年10月:8)と述べた。だが、田辺文庫にSPが所蔵されていることから、1929年ニッポン・レコードでSPは制作されたが、発売には至らなかった。「会員組織にして頒布する計画」とは発売しないことが決定した後模索した結果であろう。

以上、《四季》は②～④の方法により発表された。

(3) 《杜の苺》

《杜の苺》は《沈仁屋久節》のメロディーを元に編曲された。歌詞1番は《沈仁屋久節》の本歌「城の前の苺、来年もなれよ苺、ヂンニャク、我等が籠小造くて摘いんか苺、ヒヤルガゼンニャク」(山内1929年10月:9)を共通語に訳した。2～4番は山内選定による琉歌を佐藤が共通語訳した。

1929年4月19日 JOAK 東京他5局で放送された記事には「童謡 杜の苺」とあり、「唄 川平喜久子」により歌われた(1929年4月19日『読売新聞』9)。

山内は「レコードには未だ吹込まない」と記し、録音には至っていない。

以上、《杜の苺》は②④により発表された。

(4) 《四季口説》

《四季口説》は七五調の歌詞で歌われる沖縄民謡である。歌詞は「『若がへて』(若がへりて)を『若がへり』にした外訂正はなく、ただ発音は訛を去って日本式にした」(山内1929年10月:9)。

同曲は1927年8月13日 JOAK 東京「民謡の夕」で琉球及八重山群島民謡の1曲として放送された。「蛇皮線 山内盛彬、囃子 山内秀子、箏 沖島一郎、笛 山口三郎」(1927年8月13日『読売新聞』9)と記され、1927年のラジオ放送では玲琴を使用していない。山内秀子は山内の二女である。《四季口説》の解説とし

て「元禄時代の海道下りに似た様な曲であって、最も日本、本土の香が高い」（1927年8月13日『日刊ラヂオ新聞』3）とある。

「民謡の夕」では朝鮮、琉球八重山、北海道、佐渡、仙台、水戸、下総の各地方の民謡から選曲された。番組を主催した町田嘉章は「出来るだけ、広い範囲で、而も、少しのまじり気もない純民謡を、御聞かせ致し度いと思ひまして、樺太から琉球、佐渡という風に各地方のご出演を願ひました…中略…八重山民謡は非常に珍しいばかりでなく斯道の研究資料にもなると思ひます」（下線部筆者）（1927年8月13日『日刊ラヂオ新聞』3）と述べた。沖縄民謡から《四季口説》《踊りクハデサ節》《イジュハイツクテン節》、八重山民謡から《八重山ハトマ節》《八重山恋の花節》《八重山与那国の猫小節》が放送された（曲名の表記は1927年8月13日『日刊ラヂオ新聞』3に拠る）。

1929年4月19日JOAK東京他5局でも《四季口説》は放送されたが、使用楽器は「唄：山内玲光、蛇味線：沖野一郎、玲琴：田辺禎一、笛：三浦幸夫、太鼓：山口光輝、四ツ竹：原美津夫」（1929年4月19日『読売新聞』9）である。1927年と比較すると、箏が玲琴へ変わり、打楽器の太鼓と四ツ竹が加わった。

山内は「レコードには未だ吹込まない」と記し、録音には至っていない。

以上、《四季口説》は①②④により発表された。

(5) 《取ったる金は》

《取ったる金は》の元歌は奄美諸島から沖縄へ伝来した恋歌《とうたんかーに》である。「もうけたお金は〜で散財してしまった」という内容で、地名を適当に替えて歌われ、かつて遊郭で大いに流行った（日本放送協会編 1993:641 参照）。《とうたんかーに》は、沖縄の歌劇『伊江島ハンドー小』や『中城情話』で歌われ、各地の村芝居、エイサーにも登場する（仲宗根 1985:123 参照）。《取ったる金は》歌詞1番、4番は定型を共通語訳し、2〜3番は創作だと思われる。1929年4月19日JOAK東京他5局では「唄 山内玲光、唄 川平喜久子」（1929年4月19日『読売新聞』9）により放送された。1929年《取ったる金は》は《四季》の裏面に録音したが、レコード発売はされなかった。1930年三越「琉球展覧会」第1回（1930年1月21日〜24日）「琉球民謡と舞踊」には、「番外 訳詩民謡 取ったる金は 出演 山内すみ子 伴奏 玲琴 伊野伶晃」（三越編 1930:39）と記録がある。

以上、《取ったる金は》は②〜⑤により発表された。

(6) 《与那国の小猫》

八重山民謡《与那国の小猫》の元歌の意味は「旧藩時代役人とその妖婦の先妾（ニックネーム猫小）と後の妾（犬小）との三角関係を比喩的に述べた」（山内 1929年10月:10）。山内によると「3、4の歌の表現は甚だ巧みである。固有名詞が多かったので

意識して普通的にした。6は私が選定した」（山内 1929年10月:10）。

《与那国の小猫》は1927年8月13日JOAK東京「民謡の夕」琉球及八重山群島民謡の1曲として「蛇皮線 山内盛彬、囃子 山内秀子、箏 沖島一郎、笛 山口三郎」（1927年8月13日『読売新聞』9）で演奏された。解説に「これは羽衣会の中村福助氏が、（筆者注：1925年）歌舞伎座で公開された与那国物語の本場の八重山島の南端、与那国島の、諧謔軽妙な曲」（1927年8月13日『日刊ラヂオ新聞』3）とある。田辺は1925年4月「羽衣会第3回公演」に沖縄民謡を織り込んだ歌舞伎舞踊劇『与那国物語』を上演したが、これは与那国島を舞台とした物語であった（高橋 2019 参照）。

同曲は1929年4月19日JOAK東京他5局で放送され、同年5月ニッポン・レコードからSPも発売された。

歌詞は1927年8月13日、1929年4月19日『読売新聞』ラジオ欄、山内 1929年10月:10に掲載されているが、いずれもほぼ同内容である。なお、レコードには『与那国の小猫』と表記されているが、『与那国の猫小』が正しい。

以上、《与那国の小猫》は①〜④により発表された。

(7) 《はとま節》

八重山民謡《鳩間節》の元歌の歌詞を共通語に訳した。歌詞は山内 1929年10月:10に掲載されたが、「此曲は放送吹込は未だである」（山内 1929年10月:10）と記し、放送・録音は実現していない。

以上、《はとま節》は④により発表された。

(8) 《とばらま節》

八重山民謡《とばらま節》の元歌の歌詞を共通語に訳した。歌詞は山内 1929年10月:10に掲載されているが、「此曲も放送吹込はまだである」（山内 1929年10月:10）と記し、放送・録音は実現していない。

以上、《とばらま節》は④により発表された。

3.5 外向き発信志向の「訳詩琉球民謡」

表6「訳詩民謡8曲 発表方法一覧」は3.4をまとめたものである。

山内は琉球古典音楽や沖縄民謡を演奏する際「聴衆が、発音の相違から来る歌詞の不可解の点」（山内 1929年10月:6）を克服する手立てとして、「訳詩琉球民謡」に取り組んだ。琉球方言を理解することができない聴衆へ音楽を発信する方法を模索した結果である。山内による「訳詩琉球民謡」の活動は（外向き）発信スタイルの起点に位置づけられる。

筆者は沖縄のポピュラー音楽に関する歴史的研究をふまえ、〈内向き〉〈外向き〉という2つの発信スタイルを提案してきた

(高橋 2003、高橋 2010a:6-7 参照)。(内向き)発信スタイルとは、音楽作品やレコードを沖縄、日本、海外における沖縄系エスニック・コミュニティに向けて発信するスタイルである。一方、(外向き)発信スタイルとは、沖縄と異なる言語、文化、生活習慣をもつ社会的集団及び他文化社会へに向けて発信される音楽の志向を指す。

(内向き) (外向き) という問題は「外部との接触から起きる流用(appropriation)によって文化が創造」(太田 1998:47)されるという現象を浮き彫りにする。山内が「大正 13 年(筆者注:1924 年)に上京して以来、東都に於て、琉球の音楽や民謡を屢々紹介…中略…放送に演芸に講演の実演に機会ある毎に出演」(山内 1929 年 10 月:6)した活動は「外部との接触」と捉えられる。沖縄にルーツをもたない日本本土の人々や社会に向けて、いかなる音楽をどのような方法で発信し得るかという課題が山内に突きつけられていた。

一方、琉球方言の歌詞を共通語に改作する試みは 1934 年日本コロムビア・レコードにおける SP『安里屋ユンタ』の制作で実践されている(高橋 2010a、高橋 2012a、高橋 2015 参照)。同曲は八重山古謡《安里屋ユンタ》の歌詞を星克が八重山の方言から共通語に改作し、石垣島出身の作曲家・宮良長包が編曲した。沖縄の御当地ソングを作りたいというレコード会社の意向が実現し、レコードを発売した結果、日本本土でも流行し替え歌も積極的に作られた。現在でも全国的認知度が高い《安里屋ユンタ》は日本全国の大衆へ(外向き)に発信された沖縄のポピュラー音楽であった。

「訳詩琉球民謡」の《四季口説》《与那国の小猫》は 1927 年にラジオ放送されており、コロムビアより 7 年前に発表されている。よって、山内は佐藤惣之助と共同で(外向き)発信を先駆的に実施し、ラジオ、レコード、演芸会、雑誌論文を通じて発表していたことが指摘できる¹⁶⁾。

表 6 「訳詩琉球民謡8曲 発表方法一覧(訳詩:佐藤惣之助、編曲:山内玲光)」 作成:高橋美樹

順番	曲名	歌詞	1927年8月ラジオ	1929年4月ラジオ	1929年5月SPレコード	1929年10月『民謡集』6号	1930年1月「琉球展覧会」
1	奄美節	共通語訳/創作		○	録音・発売	○	○
2	四季	共通語訳		○	録音	○	
3	杜の蓐	共通語訳		○		○	
4	四季口説	共通語発音	○	○		○	
5	取たる金は	共通語訳/創作		○	録音	○	○
6	与那国小猫	意識	○	○	録音・発売	○	
7	はとま節	共通語訳				○	
8	とばらま節	共通語訳				○	



写真 8 独唱:川平喜久子,蛇皮線:山内玲光
SP『奄美節』トシボ:15015-B



写真 9 独唱:川平喜久子,蛇皮線:山内玲光
SP『取たる金は』トシボ

作成:高橋美樹

表5 ニッポン・レコードSPレコード目録(沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵)

請求記号	曲名	歌手・演奏者	レコード番号	記載ジャンル	分析ジャンル	ジャンル	レーベル名	レーベル紙/文字	製造元	推定発売年	備考
田辺312	与那国小猫	独唱:川平喜久子, 蛇皮線:山内玲光, 囃子鳴物連中	15015-A	琉球新民謡	新民謡	トンボ	トンボ	黒地/金文字	ニッポン・レコード	1929	電気吹込
田辺312	奄美節	独唱:川平喜久子, 蛇皮線:山内玲光, 囃子鳴物連中	15015-B	琉球新民謡	新民謡	トンボ	トンボ	黒地/金文字	ニッポン・レコード	1929	電気吹込
田辺311	四季	独唱:川平喜久子, 蛇皮線:山内玲光, 囃子鳴物連中	なし	琉球新民謡	新民謡	トンボ	トンボ	黒地/金文字	ニッポン・レコード	1929	電気吹込
田辺311	取たる金は	独唱:川平喜久子, 蛇皮線:山内玲光, 囃子鳴物連中	なし	琉球新民謡	新民謡	トンボ	トンボ	黒地/金文字	ニッポン・レコード	1929	電気吹込

4. トモエ・レコード制作・沖縄音楽 SP レコード

田辺文庫にはトモエ・レコードが制作した SP レコード 11 枚と歌詞カード 4 枚が所蔵されている。トモエ・レコードは田辺文庫で唯一の沖縄音楽専門のレーベルである。4 では田辺文庫所蔵 SP について整理した後、沖縄県立図書館所蔵のレコード目録を対象に選曲やジャンル、歌手・演奏家の変遷を辿る。

4.1 トモエ・レコード

トモエ・レコードはヨシヤ楽器店と自声堂が発行した沖縄音楽専門のレーベルである。SP 盤の製造はコロムビア・レコード、帝国蓄音器、オーゴン・レコード、阪急国際興業などに委託していた(内務省警保局 1981b:580 参照)。2つの発行店について『蓄音器時報』1934 年 4 月号には次のように記された。

沖縄蓄音器商組合

ヨシヤ楽器店 比嘉良勲

那覇市上之蔵町 1-26 電 291

自声堂 比嘉良実

那覇市上之蔵町 1-75 電 688

(東京蓄音器商組合 1934:6)

発行責任者の比嘉良勲、比嘉良実とは姓が同一で、名前の頭文字が共通しているため、2人は親戚関係にあると推察される。

ヨシヤ楽器店について詳細は不明だが、1936 年 1 月 19 日『沖縄日報』1 に「歳末大売出し/楽しい御正月の御準備はヨシヤのレコードから/Tomoe ヨシヤ楽器店」という見出しの広告が掲載されている。「ハーモニカ 大正琴 ヴァイオリン マンドリン 唄本 カルタ トランプ 百人一首/奉仕品掘出品山積み」という記述から、洋楽器や歌集も販売していたことがわかる。

『東洋時計貴金属 眼鏡蓄音器商工名鑑』1921 には「時計店 自声堂 那覇市西本町 4-46」という記載があり、責任者は比嘉良実である。16 年後に発行された沖縄日報社編 1937 には那覇時計商組合に「自声堂 比嘉良哲 那覇市西本町 4-46」、沖縄蓄音器商組合に「自声堂 比嘉良実 那覇市上ノ蔵町 1-75」と、2つの「自声堂」の記録がある。つまり、時計店「自声堂」と楽器店「自声堂」が那覇市内で同時期に営業していた。そして、時計店「自声堂」の責任者・比嘉良実が楽器店「自声堂」の責任者へ移行した。

楽器店「自声堂」の設立年は不明だが、1926 年 3 月 25 日『琉球新報』4 に「広告 最新譜レコード到着/石門通り 自声堂」が掲載されているため、1926 年には営業を開始していた。また、同広告の「高級地球印レコード 1 円」という記載は先述した大阪蓄音器の原盤を受け継ぎ、日本蓄音器商会で製造されたオリエントのレーベルを指している。レーベルのデザインが地球儀の上にラクダなどが乗っているため、通称「地球印」と呼ばれていた。1922 年に田辺が購入した SP (0-23) (0-24) もオリエントの

レーベルであり(先述)、1926年に楽器店「自声堂」でも販売されていた。

また、1935年『関西沖繩興信名鑑』には下記のような広告が掲載された。

最新改良 トモエ印 電気吹込
 琉球古典劇。組踊。最新流行節其他各種
 ◎御一報次第目録無代送呈致シマス
 レコード 蓄音器 附属品
 自声堂楽器店
 製作総販売元 那覇市石門通り三角
 電話 688 番 那覇私書箱 173 号
 (下線部筆者)(関西沖繩興信社 1935)

自声堂では楽器、レコード、蓄音器を販売していた。「目録無代送」という文言からレコード目録を作成し、無料で送っていたことがわかる。

トモエ・レコードの制作開始の時期は不明である。ただし、1928年9月7日『沖繩昭和新聞』3に「広告 御待ち兼ねの最新琉球レコード／琉球レコードは最高級巴鶴印に限る」が掲載されている。歌手・演奏家として伊差川世瑞、池宮喜輝、永村清蒲、宇利地小カメ、小湾カマドの名が挙がっている。「巴鶴印」とあるため、琉球ツル・レコードの広告とも考えられるが、現時点の調査において、伊差川世瑞が同レコードで録音した記録及びSPは見当たらない。よって、トモエ・レコードによる広告だと判断した。トモエ・レコードは1928年時点で既に設立していたと捉えられる。

4.2 田辺文庫所蔵SP11枚

表7は田辺文庫SP11枚を凡例に沿ってまとめたものである。レコード番号151～308から11枚が所蔵しており、全て両面盤である。録音曲目は22曲、4作品でジャンル名も記載されている。凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典12曲、沖繩民謡1曲、八重山民謡5曲、新民謡2曲、組踊2作品、漫談2作品、願文1曲、不明1曲となった。

SP6枚の歌手・演奏家として、又吉栄義、親泊興照、永村清蒲、糸数カメ子、譜久山朝明、譜久山ナベ、山口光輝、赤嶺音子、玉城初子が挙げられる。古典と組踊は又吉栄義、八重山民謡は譜久山朝明と譜久山ナベ、新民謡は親泊興照と糸数カメ子、漫談は永村清蒲と糸数カメ子が主に担当している。実際のSPは写真10糸数カメ子、SP『汗水節』183-A、写真11 又吉栄義、SP『花売の縁(九)』307-A、SP『安里屋のユンタ』(八重山方言)の歌詞カードは図2を参照されたい。

なお、下記の音源はCD解説に明記していないが、CD『SP盤復元による沖繩音楽の精髓(下)』に収録されている。

SP『汗水節』183-A、SP『手水の縁(五)』287-A、『手水の縁(六)』288-B、SP『花売の縁(九)』307-A、SP『花売の縁(十)』308-B

4.2.1 1934年4月15日新譜『既発売特選目録』

沖繩県立図書館にレコード番号151～308(SP:79枚)の種別と歌名が記載されたトモエ・レコード『既発売特選目録』(図3参照)が所蔵されている。録音曲目は153曲15作品(全158トラック)で、レーベルには下記のジャンル名も記載されている。

御前風、元節、本節、大節、端節、端唄、小唄、搔唄、民謡、宮古民謡、八重山民謡、尾類小風、踊唄、踊節、流行唄、古典劇、歌劇、喜劇、悲劇、漫談、滑稽、願文、狂歌、琴曲、実況、女流

凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典66曲(50.5トラック)、沖繩民謡24曲(16トラック)、宮古民謡2曲(2トラック)、八重山民謡43曲(27.5トラック)、新民謡2曲(2トラック)、歌劇9作品(13トラック)、組踊2作品(26トラック)、舞踊曲4曲(4トラック)、漫談作品4作品(6トラック)、箏曲2曲(2トラック)、不明12曲(9トラック)となった。

吹込者として、又吉栄義、親泊興照、永村清蒲、糸数カメ子、譜久山朝明、譜久山ナベ、山口光輝、赤嶺音子、玉城初子の名前が記録してある。注文枚数の欄があるため、宣伝・販売用レコード目録だといえる。下部に「発売元:自声堂(電気吹込 トモエ琉球レコード)沖繩県那覇市上ノ蔵町1ノ75【新天地前角】電話688番、振替口座熊本2135番」とある。

1934年4月15日『琉球新報』1に掲載された広告「昭和9年度新譜到着 トモエ琉球レコード／コロムビア特約店 自声堂」(図4参照)と目録151～308の曲名がほぼ一致した。よって、『既発売特選目録』は1934年4月15日に新譜として発売した目録だと判断した。

また、『琉球新報』広告掲載から2ヶ月後の1934年6月15日『先島朝日新聞』には、石垣島「よせだ時計店(筆者注:興世時計店)」の広告が掲載された。広告には「蓄音器 レコード 販売開始／御披露ノタメ向フ1ヶ月間特価提供 家庭団楽至上ノモットータル蓄音器ト琉球レコードノ御備付ヲ／トモエレコード大平レコード(筆者注:マルフク・レコード)特約店 よせだ時計店」とある。よって、石垣島までトモエレコードとマルフク・レコードのSPが商品として流通していたことが判明した。

また、「東京、オーゴンレコード会社に於て製作／昭和9年11月以後発行のものは奈良、帝蓄に於て製作」(内務省警保局1981a:381)という記述がある。151～308は1934年11月以前に発行されたため、オーゴン・レコードの製造だといえる。

「オーゴン・レコード合資会社(のち株式会社)は、前記のニッポン・レコード合資会社を母体として設立された会社で、昭和7

年10月に1回目の新譜を発売している。会社の場所も同じ東京田端である…中略…オーゴンという弱小のマイナー・レーベルのように思っている人もいるようだが、決してそうではなく、自前の製造設備を備えているレッキとした大手レコード会社だった。レーベルはオーゴン、トンボ、ホーオー、ユーモアの4種(岡田1992年5月:112)であった。他社の制作盤を請負っており、そのレーベルの中に「トモエ琉球レコード」も含まれていた(岡田1992年5月:112参照)。

また、「昭和9年12月末現在『レコード』発行状況調内訳表」 「トモエ琉球レコード」の項目には「10」[黒1,50、青1,20](筆者注:10インチSP:黒盤1円50銭、青盤1円20銭)と、サイズ、レーベル色、価格が記されている(内務省警保局1981b:381)。151～308は黒盤であるため(写真10、写真11参照)、1円50銭で販売されていた。

内務省警保局図書課1934には「管下ニ於テ発行レコードハ本県特殊ニシテ年一回又ハ隔年臨時吹込者ヲ囑託シテ1種2百枚宛テ製作セシメ売行キニ依リ増製セシ居ルノ状態ナリ」とある。1年または隔年に臨時に録音者へ依頼し1種類のSPを200枚製造する。そして、売上枚数によって再プレスを実施した。この手法は最初の沖縄音楽専門レーベルであるマルフク・レコードと共通する(高橋2007参照)。マルフクを設立した普久原朝喜は「確実に利益を伸ばすためにレコードを数多く録音し、プレス枚数を少なく見積もるといふ商業的手法を実践していた」(高橋2007:66)。一度レコードをプレスした後、ヒットするとプレス枚数を増やしていったのである(照屋・普久原1982:73参照)。

4.2.2 歌手・演奏家の経歴

(1) 又吉栄義

又吉栄義は野村流の創始者・野村安麿の孫弟子にあたる伊差川世瑞に古典音楽を学んだ演奏家である。「琉球音楽家の系図」(野村流音楽協会編1974:150)にも伊差川の高弟6名の1人として名を連ねている。「昭和7年(筆者注:1932年)、古典音楽のレコード吹き込みのために上京。8月、その帰路、弟子の上間嘉助氏の要請で大阪に立ち寄った…中略…古典音楽を学ぶ7人の青年たちの訪問をうける。そして彼らの熱心な説得で、栄義氏は、大阪で古典音楽の指導にあたることを決心するのだ」(青い海大阪支社編集部1980年3月:65)。

青い海大阪支社編集部1980年10月:65-66によると、『野村流音楽研究会』と名づけた又吉栄義一門は1933年5月17日大阪市立理髪学校(西成区鶴見橋通り1丁目)2階の講堂で「第1回発表会」を開催、1934年7月1日には今泊共済会の今共クラブ(旭南通り)で「第2回発表会」を開催した。「第2回発表会」には沖縄から、師匠の伊差川世瑞、玉城盛義、川田松夫らを招聘したという。戦前には5回の発表会が開かれたが、戦争の激化に伴い会は自然解散し、1951年又吉は亡くなったという。

又吉が1932年に東京のどこのレコード会社で古典音楽を録音したかは不明である。ただし、1933年～1934年トモエレコードの録音時は大阪在住であったことは間違いないだろう。トモエ・レコードでは古典の他に、組踊『手水の縁』『花売の縁』の歌三線を担当している。これは又吉が沖縄や大阪時代に組踊の地謡を経験していたことを示している。幼少期に大阪で育った民謡歌手の知名定男¹⁷⁾は「佐渡山さん達は沖縄から(筆者注:沖縄芝居の)興行しに関西に来てました。帝王と言われた渡嘉敷守良さんとか、平安山英太郎さんとか、伊集亀千代さんとか。今でいうツアーだったのちがいますかね。その時に、又吉栄義先生が地謡したのです」(知名2006:18)と述べている。

さらに、又吉は1934年9月22日～10月6日コロムビア大阪支社にて、師匠の伊差川世瑞と古典音楽を録音している(高橋2012a参照)。中でも《平敷節》はコロムビアとトモエ・レコード双方で録音した曲である。

(2) 親泊興照¹⁸⁾

親泊興照(1897-1986)は大正・昭和を代表する沖縄の舞踊家、俳優である。1909(明治42)年劇団中座(座長:新垣松含)に入座、1919(大正8)年劇団球陽座(座長:渡嘉敷守良)に入座し活躍する。1932(昭和7)年真境名由康らと珊瑚座を結成した。1935(昭和8)年那覇劇場(新天地劇場)に移った珊瑚座は旗揚げ公演に親泊興照作・歌劇『中城情話』を上演した。1936(昭和11)年日本民俗協会主催による「琉球古典芸能大会」(於:日本青年館)では組踊『執心鐘入』『銘苺子』『花売の縁』に出演し、舞踊「浜千鳥」「加那ヨー」を踊った。1972年国の重要無形文化財に指定された「組踊」の技能保持者でもある。

『別れの唄』179-Aのレーベルに「(独唱 珊瑚座俳優)親泊興照」と記載があるため、珊瑚座を結成した1932年以降に録音した音源だと考えられる。『既発売特選目録』の発売時期を1934年4月15日とした本稿の判断とも一致する。

(3) 糸数カメ子(正しくは糸数カメ)¹⁹⁾

糸数カメ(1915-1991)は沖縄の民謡歌手、舞踊家である。8歳の時、辻の妓楼・錦楼(染屋小)に引き取られ、9歳で玉城盛重、玉城盛義に舞踊を師事した。13、4歳の頃から三線や琴にも興味を示し、民謡を歌った。18歳の時、レコード録音の話が持ち上がり、錦楼カメの名で《むんじゅる節》《浜千鳥節》《花風節》の3曲を録音した。戦後はマルタカ・レコードで照屋林山、前川朝昭、船越キヨと共に古典、民謡、舞踊曲を録音するなど、沖縄の民謡、舞踊界の先駆的存在として活躍した。なお、漫談『入聲(婿)放蕩の巻』269-Aの「染屋小のかめちゃん」とは糸数カメのことを指す。

(4) 山口光輝

山口は組踊『手水の縁』で琴を演奏している。だが、先述した山内が1929年4月19日JOAKで《奄美節》他を放送した際、山口は太鼓を担当していた。「出演者の中で田辺禎一氏と山内玲光氏を除いた外は、全部初放送で何れも琉球出身の人達である」(1929年4月19日『読売新聞』9)。山口は1929年当時関東に在住していた沖縄出身者だと考えられる。

ラジオ放送から5年後に発売されたトモエ・レコード151～308に山口が参加した。このことから、151～308は東京で録音された可能性もある。

4.3 1934年5月以降のレコード目録

沖縄県立図書館には『既発売特選目録』以外のトモエ・レコード目録が4点所蔵されている。4.3では1934年5月以降のレコード目録について整理する。

4.3.1 1934年5月～1935年5月『普及番目録』

『既発売最新改良電気吹込／トモエ琉球レコード／肉声其儘／普及番目録』にはレコード番号2001～2066(SP:33枚)、7535～7538(SP:2枚)のレコード番号、種別、歌名、吹込者が記録されている。下部には「製作発売元:自声堂楽器店、沖縄県那覇市石門通り三角 電話688番／振替口座熊本2135番／那覇局私書箱173号」と記載がある。下段に注文枚数の欄がある。吹込者として伊差川世瑞、玉城盛義、嘉数松雄、国吉ツル子、嘉手川トミ子、巴歌劇団員、鹿倉旭壺の名前がある。目録の発行年は不明だが、1934年4月15日新譜『既発売特選目録』と『昭和10(1935)年6月新譜目録』の間に発行されたことは確実なため、本稿では1934年5月～1935年5月とした。

製造はレーベルに「NARA-SHI TEIKOKUCHIKUONKI KABUSHIKIKAISHA」とあり、帝国蓄音器株式会社に委託していた。帝国蓄音器株式会社は1934年に設立し、本店は大阪市南区長堀橋筋2丁目3-1にあった。代表取締役社長・南口重太郎のもと、取締役として元大阪蓄音器・重役の樫尾慶三(1935年～1939年帝国蓄音器・代表取締役)、監査役に元大阪蓄音器・取締役の樫尾長右衛門(1944年帝国蓄音器・代表取締役)が経営に参画した(テイチク株式会社社史編集委員会企画・編集1986:121参照)。帝国蓄音器には1915年大阪蓄音器による沖縄音楽初のレコード制作に携わった樫尾慶三、樫尾長右衛門がいたため、トモエ・レコードの委託製造を引き受けたのかもしれない。

録音曲目は56曲+12作品(全70トラック)で、レーベルには下記のジャンル名も記載されている。

御前風、元節、端節、俗唄、搔唄、大島民謡、宮古民謡、八重山民謡、踊り節、踊節、流行唄、歌劇、悲劇、滑稽歌劇、滑稽、伊江島ロマンス、伊江島民謡、新曲、正月の唄、筑前琵琶



新電気吹込
美聲明瞭
大強音

既発売特選目録

吹込者(即名)		又吉義 磯田義照 水村清吉 赤坂アノ子 壽久山朝明 壽久山ナメ 山口充輝 赤坂アノ子 玉城初子	
歌名	吹込者	歌名	吹込者
三日月	山口充輝	花の縁	山口充輝
...
古典劇之部			
手水の縁 (全不出)			
花の縁			

自声堂

元 自声堂 電話 688 番

振替口座 熊本 2135 番

那覇局私書箱 173 号

第五三二二水産銀行

表7 トモエ・レコードSPレコード目録(沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵) 作成:高橋美樹

請求記号	曲名	歌手・演奏者	レコード番号	記載ジャンル	分析ジャンル	レーベル名	レーベル紙・文字色	発売	製造	推定発売年	備考
田辺321	カギヤザ風節	唄・三味線:又吉栄義, 琴・胡弓・太鼓伴奏	151-A	御前風	古典	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺321	恩納節・中城ハタメ節	唄・三味線:又吉栄義, 琴・胡弓・太鼓伴奏	152-B	御前風	古典/古典	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺319	金武節・松本節	唄・三味線:又吉栄義, 琴・胡弓・太鼓伴奏	159-A	本節	古典/古典	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺319	ムンヂュル節・揚芋の葉節	唄・三味線:糸数カメ子	160-B	踊節	古典/古典	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺322	平敷節・垣之花節	唄・三味線:又吉栄義, 琴・胡弓・木琴・笛伴奏	165-A	本節	古典/古典	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込 ♪歌詞カード
田辺322	安里屋のユンタ	唄・三味線:譜久山朝明, 子	166-B	八重山民謡	八重山民謡	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込 ♪歌詞カード
田辺313	別れの唄	(独唱 珊瑚座俳優)親泊興照/ 文字士 石川正通作詩	179-A	最新流行歌	新民謡	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込 ♪歌詞カード
田辺313	白保節・馬山河節	唄・三味線:譜久山朝明, 譜久山ナナ	180-B	八重山民謡	八重山民謡/ 八重山民謡	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込 ♪歌詞カード
田辺317	汗水節	唄・三味線:糸数カメ子, オリン・ピアノ・シロホン・太鼓	183-A	流行小唄	新民謡	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込/CD『沖縄音楽の精髓(下)』Disc-2,T-1
田辺317	越地節・離れ世が宮節	唄・三味線:譜久山朝明, (伴奏 胡弓・木琴・太鼓)	184-B	八重山民謡	八重山民謡/ 八重山民謡	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺314	入舞(踊)放蕩の巻	俳優:永村清浦, 染屋小のかめちやん	269-A	滑稽	漫談	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺314	真福地之盃節	唄:又吉栄義, 伴奏 三味線・琴・胡弓・明笛	270-B	元節	古典	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺320	論女の御願	俳優:永村清浦, 糸数かめ子	271-A	願文	願文	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺320	弥勒節	唄・三味線:譜久山朝明, 唄・囃子:譜久山ナナ	272-B	八重山民謡	古典	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺315	塩屋のパーパー(上)	婆々:永村清浦, 嫁孫:糸数カメ子	277-A	漫談	漫談	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺315	塩屋のパーパー(下)	婆々:永村清浦, 嫁孫:糸数カメ子	278-B	漫談	漫談	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺323	手水の縁(五)干瀬節	又吉栄義	287-A	古典劇	組踊	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込/CD『沖縄音楽の精髓(下)』Disc-1,T-7
田辺323	手水の縁(六)(玉津・山戸) 琴五段 笛 干瀬節	唄:糸数カメ子, 琴:山口光輝	288-B	古典劇	組踊	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込/CD『沖縄音楽の精髓(下)』Disc-1,T-7
田辺316	花売の縁(九)(森川妻子対面/場)立雲節	唄・三味線:又吉栄義	307-A	古典劇	組踊	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込/CD『沖縄音楽の精髓(下)』Disc-1,T-7
田辺316	花売の縁(十)(親子引連り子唄子戻り)沈仁屋久節	唄・三味線:又吉栄義	308-B	古典劇	組踊	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込/CD『沖縄音楽の精髓(下)』Disc-1,T-8
田辺318	仲風節	唄・三味線:又吉栄義, 伴奏 笛・琴	G 263-A	元節	古典	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込
田辺318	伊集のガマク小・イルサス 不節	唄・三味線:糸数カメ子, 伴奏 木琴・太鼓・ヴァンキリン	G 264-B	小唄	沖縄民謡/ 不明	トモエ	黒地・金文字	自声堂楽器店, ヨシヤ楽器店	MADE IN JAPAN OKINAWA	1934年4月	電気吹込

凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典 28 曲(22.7 トラック)、沖縄民謡 13 曲(9.8 トラック)、宮古民謡 1 曲(1 トラック)、八重山民謡 6 曲(4 トラック)、奄美大島民謡 1 (0.5 トラック)、新民謡 1 曲(1 トラック)、歌劇 12 作品(22 トラック)、舞踊曲 3 曲(3 トラック)、筑前琵琶 1 曲(4 トラック)、不明 2 曲(2 トラック)となった。

下記 SP 2 枚は南風原文化センターに所蔵されており、レーベルは赤地・金文字である。

- SP『四季口説』唄・三味線:玉城盛茂:2035-A、
 SP『鳩間節』唄・三味線:嘉手川トミ子、琴:國吉ツル子:2036-B、
 SP『愛の雨傘(上)』唄・三味線:玉城盛茂:2057-A
 SP『愛の雨傘(下)』唄・三味線:玉城盛茂:2058-B

4.3.2 『昭和 10(1935)年 6 月新譜目録』

『昭和 10 年 6 月新譜目録』にはレコード番号 3001~3030(SP:30 枚)のレコード番号、曲種、曲名、吹込者が記録されている。下部には発売元として「沖縄県那覇市上ノ蔵町 1 ノ 75(新天地前角)電気吹込 自声堂 電話 688 番/振替口座熊本 2135 番」と記載がある。下段に注文枚数の欄がある。吹込者として多嘉良朝成、多嘉良カナ子、高嶺義雄、高良文子、多嘉良キク子の氏名と顔写真が掲載された。

製造は後述する 3000 番台の SP レーベルに「HANKYU KOKUSAI KOGYO CO., LTD. LINE」とあるため、本目録の SP も阪急国際興業に委託していたと考えられる。

録音曲目は 26 曲+15 作品(全 60 トラック)で、レーベルには下記のジャンル名も記載されている。

民謡、宮古民謡、八重山民謡、流行歌、古典劇、歌劇、喜歌劇、悲歌劇、悲劇、現代歌劇、漫歌、童謡、市歌、盆祭歌

凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典 11 曲(6.5 トラック)、沖縄民謡 7 曲(6 トラック)、宮古民謡 1 曲(1 トラック)、八重山民謡 1 曲(1 トラック)、新民謡 1 曲(1 トラック)、歌劇 15 作品(40.5 トラック)、舞踊曲 2 曲(1 トラック)、童謡 1 曲(1 トラック)、不明 2 曲(2 トラック)となった。

4.3.3 『(1935 年)8 月新譜目録』

『(1935 年)8 月新譜目録』にはレコード番号 3031~3052(SP:22 枚)のレコード番号、曲種、曲名、吹込者が記録されている。発売元は『昭和 10(1935)年 6 月新譜目録』と同じである。下段に注文枚数の欄がある。吹込者として多嘉良朝成、多嘉良カナ子、高嶺義雄、高良文子、多嘉良キク子の氏名と顔写真が掲載された。「発売した 6 月新譜は怒濤の好評を博しました。謝恩! 奉仕! の意味に於きまして更に珠玉篇を網羅しました 8 月新譜発売

前回にも増して御垂愛御声援の程を!!」と宣伝文句が記載された。発行年の記載はないが、この文句により本目録は 1935 年に発行されたと判断した。製造も『昭和 10(1935)年 6 月新譜目録』と同様、阪急国際興業に委託したと考えられる。

録音曲目は 23 曲+4 作品(全 44 トラック)で、レーベルには下記のジャンル名も記載されている。

民謡、宮古民謡、八重山民謡、流行歌、歌劇、時代劇

凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典 10 曲(8 トラック)、沖縄民謡 8 曲(7 トラック)、宮古民謡 2 曲(2 トラック)、八重山民謡 1 曲(1 トラック)、新民謡 1 曲(1 トラック)、歌劇 4 作品(24 トラック)、不明 1 曲(1 トラック)となった。

4.3.4 『昭和 11(1936)年 3 月新譜目録』

『昭和 11(1936)年 3 月新譜目録』にはレコード番号 3053~3087(SP:35 枚)のレコード番号、曲種、曲目、演奏者が記録されている。発売元は『昭和 10(1935)年 6 月新譜目録』と同じである。下段に注文枚数の欄がある。演奏者として仲泊兼蒲、上間昌成、知念カメ子、大城ヒデ子の氏名と顔写真が掲載された。「年改まりまして茲に一段の飛躍を試み明朗なる珠玉盤を提供致します 猶一層御愛顧の程を!」と宣伝文句が記載された。南風原文化センター所蔵 SP のレーベルに「HANKYU KOKUSAI KOGYO CO., LTD. LINE」とあり、阪急国際興業に委託していた。

1936 年 4 月 19 日『沖縄日報』1 の広告「一段の飛躍! 明朗なる珠玉盤 トモエ琉球レコード 3 月新譜発売/自声堂」(図 5 参照)には元節、民謡、歌劇、喜劇など種別や曲名と共に、仲泊兼蒲、上間昌成、知念カメ子、大城ヒデ子の氏名と顔写真も掲載された。

録音曲目は 51 曲+13 作品(全 70 トラック)で、レーベルには下記のジャンル名も記載されている。

元節、民謡、宮古民謡、八重山民謡、流行歌、流行小唄、歌劇、喜劇、現代歌劇、小唄劇、オペラコミック、ダンス曲、漫才、沖縄漫才、農事奨励

凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典 40 曲(35 トラック)、沖縄民謡 8 曲(7 トラック)、新民謡 1 曲(1 トラック)、歌劇 10 作品(21 トラック)、漫談 2 作品(2 トラック)、不明 2 曲 1 作品(4 トラック)となった。

下記 SP 2 枚は南風原文化センターに所蔵されており、レーベルは黒地・金文字である。

- SP『ウルマ節』知念カメ子・大城ヒデ子:3054-A
 SP『サレリーダンス』大城ヒデ子:3054-B

SP『瓦屋節・シヨングナイ節』知念カメ子:3066-A

SP『あべこべ問答』上間昌成・大城ヒデ子:3066-B

5. 日本コロムビア・レコード制作・沖縄音楽 SP レコード

田辺文庫には日本コロムビア・レコード(以下、日本コロムビア)が1934年に録音した14枚(発売は1934年～1936年)、1958年に録音・発売したSPレコード1枚、さらに歌詞カード15枚が所蔵されている。コロムビア・レーベルの発売元は1928年設立の日本コロムビア蓄音器株式会社であり、田辺文庫で唯一の大手レコード会社(メジャー・レーベル)である。先述した日本蓄音器商会は日本コロムビアの前身である。

1934年に日本コロムビア大阪支社で録音したSP(全32枚)は、歌手・演奏家が沖縄本島、宮古島、八重山諸島から一堂に会した初めてのレコードである。沖縄県石垣島出身の民俗学者・喜舎場永珣(1885-1972)は人選、選曲をはじめ、沖縄から大阪までの長い船旅(1934年9月18日～10月4日)の引率者として重要な役割を果たした。先述した《安里屋ユンタ》はこの時ピアノとバイオリン伴奏で録音した作品である。

また、金武良仁は1934年に日本コロムビア大阪支社で、1936年には5月30日～31日「琉球古典芸能大会」(主催:日本民俗協会、於:日本青年館)出演のため東京滞在中に日本コロムビア東京本社で古典を録音した。1936年発売のSP(全13枚)には同年録音音源の他、1934年に録音した音源も収録されていた。

1934年・1936年録音SPの歴史的意義と喜舎場の役割については既に高橋2012aで論じている。本論では田辺文庫所蔵SPについて整理した後、高橋2012a発表以降、調査で明らかになった4点について述べる。

5.1 コロムビア・レコード田辺文庫所蔵SP11枚

表8は田辺文庫SP15枚を凡例に沿ってまとめたものである。1934年録音・1934年～1936年に発売されたSPが13枚(28129～28988)、1934年録音・1952年に再プレス発売されたSPが1枚(A1452)、1953年に録音・発売されたSPが1枚(A3046)が所蔵してある。全て両面盤である。録音曲目はのべ29曲でジャンル名も記載されている。凡例⑥の分析概念に基づき分類した結果、古典17曲(上・下は1曲にカウント)、沖縄民謡4曲、宮古民謡2曲、八重山民謡4曲、新民謡2曲、となった。

28129～28988とA1452の歌手・演奏家として、古典の安富祖流から金武良仁と古堅盛保、宮古民謡は友利明令、天久恵秀、八重山民謡は大浜津呂、崎山用能、仲本マサ子、他に芸妓の辰己初子、新崎マサ子が挙げられる。古典の野村流から伊差川世瑞、又吉栄義(大阪在住)が参加していたが、田辺文庫にSPは所蔵されていない。実際のSPは写真12、写真13、写真14、写真15、歌詞カードは図6、図7を参照されたい。

SP『ちんぼら小・赤山／宮古根・汀間当』A3046の歌手・演奏家は山内昌徳(後述)である。実際のSPは写真16、歌詞カードは図9を参照されたい。

28129～28988のレーベル・デザインは黒地に金文字で、ロゴの上に「Viva-tonal Recording」、下部2本線の内側に会社名と所在地「MADE BY NIPPONOPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN」を英語表記した。岡田1993年4月:107では〔タイプ3-a-i〕に分類され、西條八十、SP『母の部屋』(コロムビア、28854)(岡田1993年4月:84)と同じデザインである。国立国会図書館・歴史的音源によると、SP『母の部屋』は1936年5月に発売された。28129～28988は1934年～1936年に発売しており、同時期のデザインだといえる。

A3046のレーベル・デザインはえんじ地に銀文字で、「レーベル外周部分にあった社名等の英語表記がセンター穴の真上にレイアウトされ…中略…A盤最後のデザイン」(大西編2011:36)である。「©'58.7」と発売年月が表示された。大西編2011:36でも、1959年12月発売の市川松蔭SP『お園恋しぐれ』A3207が、同様のデザインとして紹介されている。

5.2 「死線を越えてレコードの旅へ」と室戸台風

喜舎場は大阪における日本コロムビアでの録音旅行記を1934年10月21日～1935年1月21日「連載全8回 死線を越えてレコードの旅へ」『八重山民報』に記している。なぜタイトルに「死線を越えて」という文言が含まれているのか、その理由は不明であった。だが、1934年9月18日那覇港を出発し、喜舎場ら一行を乗せた台南丸が日本の気象事業始まって以来最も超大型の「室戸台風」に遭遇していたことが判明した。室戸台風は1934年9月21日四国の室戸岬付近に上陸し、京阪神地方を襲った。「暴風雨と高潮による被害は大阪府がもっとも大きく、近畿・四国を中心として全国で死者・行方不明者は3036人に至った」(饒村2019)。室戸台風の甚大な被害によって、「暴風警報の全面的改正など種々の改革が行われた」(饒村2019)ほど、日本の気象事業に大きな衝撃を与えた。

喜舎場によると「風禍の味をひどく知りぬいている私共は不安で胸の早鐘の鳴りが静らない。床に着いてもまんじりともせず、悪夢に襲われる計りでしたが土佐沖に差し掛ける頃、とても免れないと船長が思い、直ちに方向を転向して低気圧のコースと反対の方向たる豊予海峡に入り、瀬戸内の袋のなかに避難して投錯し風の静まるのを待った」(喜舎場1934年12月1日)。一方、沖縄の「静謐なる島ではラヂオの誇張なる報導に迷わされ300尺の津浪で巻き込まれて海底の藻屑となった者だと思ひ三日三晩は憂鬱の空気に包まれ…中略…23日安着の吉報2回によって一同は愁眉を開き蘇った」(喜舎場1934年12月11日)。喜舎場は1934年9月21日無事に神戸港に到着した自分たちを「死

線を突破せる一行」(喜舎場 1934 年 12 月 11 日)と称し、連載タイトルを「死線を越えてレコードの旅へ」と名付けたのである。

5.3 金武良仁の古典演奏／大阪からラジオ中継

1934 年 11 月 5 日午後 0 時 25 分から、ラジオ「お昼の演芸」の番組内で金武良仁(1873-1936)の演奏する琉球古典音楽 4 曲が放送された。『東京朝日新聞』『読売新聞』のラジオ欄では、大阪からの中継で JOAK 東京、JOBK 大阪で放送されたことが確認できる。また、九州の熊本、福岡、小倉、長崎でも同番組が大阪から中継されていた(1934 年 11 月 5 日『九州日日新聞』1)

金武良仁は 8 歳の時から三線に親しみ、19 歳で安富祖正元の高弟・安室親雲上(朝持)に師事し、琉球古典音楽を学んだ。1890 年「25 歳の時、東京の尚侯爵家で西園寺公望・大隈重信らを招いての席上で琉球音楽を披露した」(日外アソシエーツ編 1998: 208)。1900 年 11 月 10 日東京音楽学校奏楽堂で《コテイ節》他 4 曲を演奏し、同年 11 月 12 日東京音楽学校の邦楽調査掛により《作田節》他を蠟管録音した。「三線と声楽の一体化をめざす安富祖流をうけつぎ、演奏法の体系化をなしたとげた」(講談社編 2019)人物である。

良仁の息子・金武良章は著書『御冠船夜話』の中で、父の乗った船が室戸台風に遭遇した夜、「家族や親類縁者の安否を気づかって駆けつけてきた人々と共に、不安の一夜を明かし」(金武 1983:188)たと、当時の心境を書き綴った。さらに、良仁のラジオ放送についても 6 ページに亘り詳細に綴り、下記はその抜粋である。

父から「アス、大阪放送局カラ『かぎやで風』『こてい節』『仲風』『述懐』ヲ放送スル」との電報。…中略…「ふで屋(筆者注:首里の文房具店)手製の六球ラジオから、澄みきった声で、しかも本ものの「やまとうぐち」で、父の演奏を告げるアナウンスがありました。ラジオの感度は、すこぶる好調。やがて、静かに「かぎやで風」の「うたむち(筆者注:前奏)」が弾き始められ、そして「きゆうめう…」の歌声が聞こえてきました。その時の感動、あの胸の躍りといったら、ありませんでした。演奏の方も、普段の父と、全く変りない、ゆったりと心なげです。聴き入っていると、まるで自分の目の前に父が座っているような錯覚さえおぼえるほどでした。「かぎやで風」「こてい節」「仲風」「述懐」と順々に進み、4 曲は、アツという間に歌い終わってしまいました。(下線部筆者)(金武 1983:190-194)

ラジオから聴こえる父の歌声に心から感動した様子が伝わってくる。1942 年に NHK 沖縄放送局 JOAP が開局されるが、1934 年時点では開局されていないため、良章は九州で放送された電波を首里で受信したと推察される。

また、『御冠船夜話』には次のような重要事項も記されていた。

(1)『琉球新報』に「金武の松金(筆者注:良仁)が電波にのせて」という見出しの記事が掲載された。

(2)ラジオを聴こうと、ふで屋に集まった大勢の中に、尚琳男爵、平良医院の正先生、屋部憲通(屋部軍曹:沖縄県初の軍人)らが入った。

(3)ラジオを聴取の後、屋部軍曹が「この声、大阪の空、『父』の耳にも届けとばかりに、双手を大きく上げての万才」(金武 1983:194)をした。

1934 年 11 月 5 日『東京朝日新聞』7 には、ラジオで演奏した《かぎやで風節(本調子)》《コテイ節(本調子)》《仲風節(二上り)》《述懐節(二上り)》の歌詞と解説も掲載された。1934 年 11 月 5 日『読売新聞』10 には良仁の経歴、顔写真と共に「現在は沖縄県首里市に音楽指南所を設け女学生に琴と蛇味線の指導をしている、目下大阪に滞在中」とある。喜舎場 1935 年 1 月 21 日によると、録音を終えた一行は 1934 年 10 月 4 日に那覇港に到着した。だが、ラジオ放送は同年 11 月 5 日である。良章も「父は、レコードの吹き込みも予定通りに終えて、久しぶりの観光を楽しんでいるらしい」(金武 1983:190)と記しており、良仁は録音終了後、沖縄へは帰らず、大阪に残留したと考えられる。なお、演奏した 4 曲は日本コロムビアでも録音している。

5.4 コロムビア SP 再発売²⁰⁾の変遷

1934 年録音の SP(全 32 枚)、1936 年金武良仁が録音した SP(全 13 枚)は発売後、再プレスされ、SP、LP、CD など媒体を換えて再発売されている。5.4 ではその変遷を辿る。なお、SP の音源は国会国会図書館デジタルコレクション/歴史的音源で聴取可能である。



写真 12 唄・三味線:辰巳初子、琴:新崎まさ子
SP『上り口説』コロムビア:28129



写真13 唄:友利明令、ピアノ伴奏:天久秀人
SP『根間の主』コロムビア:28137



写真14 唄・三味線:大濱津呂、琴・唄:崎山用能、
唄:仲本マサ子 SP『目出度節』コロムビア:28257



写真15 唄・三味線/金武良仁、SP『こてい節』
コロムビア:28254

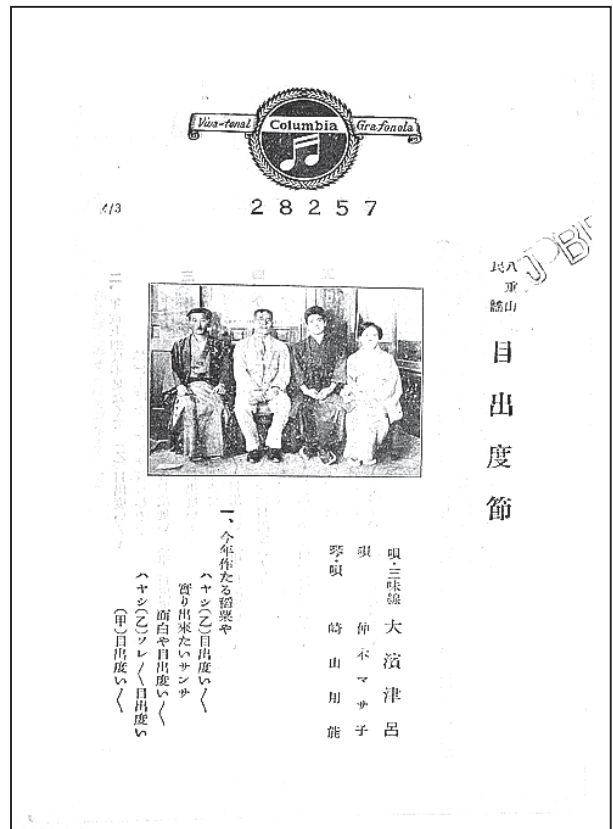


図6 SP『目出度節』歌詞カード:コロムビア:28257

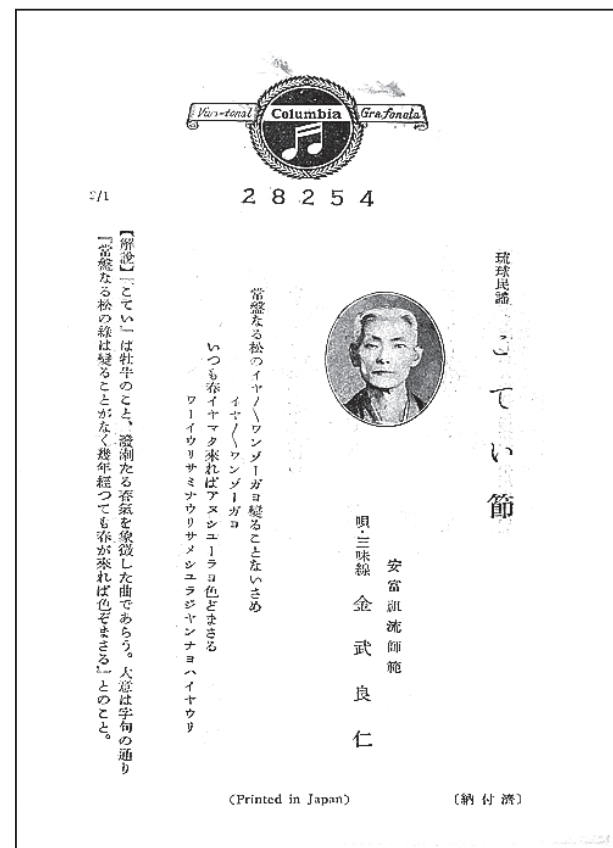


図7 SP『こてい節』歌詞カード:コロムビア:28254

表8 コロムビア・レコードSPレコード目録(沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵) 作成: 高橋美樹

請求記号	曲名	歌手・演奏者	レコード番号	録音ジャンル	分析ジャンル	レーベル名	レーベル紙/文字色	製造元	録音年月/発売年月	備考
田辺299	上り口説	唄・三味線/辰巳初子, 琴・新崎まさ子	28129(142080)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	
田辺299	四季口説	唄・三味線/辰巳初子, 琴・ハヤシ/新崎まさ子	28129(242104)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	見本品
田辺295	かぎやで風節	安富祖流師範/唄・三味線/金武良仁	28132(142086)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	見本品/歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-1-1
田辺295	恩納節・中城はんだ前節	安富祖流/唄・三味線/古堅盛保	28132(242087)	琉球民謡	古典/古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-1-1
田辺296	かぎやで風節	安富祖流師範/唄・三味線/金武良仁	28132(142086)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-1-4
田辺296	恩納節・中城はんだ前節	安富祖流/唄・三味線/古堅盛保	28132(242087)	琉球民謡	古典/古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-1-4
田辺293	述懐	安富祖流師範/唄・三味線/金武良仁	28135(142098)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-2-5
田辺293	仲風節	安富祖流/唄・三味線/古堅盛保	28135(242099)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-2-5
田辺285	豆が花	唄/友利明令, ピアノ/伴奏/天久秀人	28137(142108)	宮古民謡	宮古民謡	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-2-9
田辺285	根間の主	唄/友利明令, ピアノ/伴奏/天久秀人	28137(242118)	宮古民謡	宮古民謡	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	見本品
田辺287	安里屋ユンタ	唄/大濱津呂・崎山用能・仲本マサ子, ピアノ・ヴァイオリン/伴奏	28138(142114)	八重山民謡	新民謡	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	見本品/CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-2-22
田辺287	とまた松節	唄/大濱津呂・崎山用能・仲本マサ子, ピアノ・ヴァイオリン/伴奏	28138(242116)	八重山民謡	八重山民謡	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1934年12月発売	
田辺292	こてい節	安富祖流師範/唄・三味線/金武良仁	28254(142090)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1935年2月発売	歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-1-2
田辺292	仲間節	安富祖流師範/唄・三味線/金武良仁	28254(242091)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1935年2月発売	歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-1-2
田辺291	作田節(上)	安富祖流/唄・三味線/古堅盛保	28255(142094)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1935年2月発売	CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-1-1
田辺291	作田節(下)	安富祖流/唄・三味線/古堅盛保	28255(242095)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1935年2月発売	CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-1-1
田辺288	赤馬節	唄・三味線/大濱津呂, 琴・崎山用能	28257(142098)	八重山民謡	八重山民謡	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1935年2月発売	歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-2-10
田辺288	目出度節	唄・三味線/大濱津呂, 琴・唄/崎山用能, 唄/仲本マサ子	28257(242071)	八重山民謡	八重山民謡	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1935年2月発売	見本品/歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-2-11
田辺294	諸純節(上)	安富祖流師範/唄・三味線/金武良仁	28449(142092)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒字/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1935年2月発売	歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-1-8
田辺294	諸純節(下)	安富祖流師範/唄・三味線/金武良仁	28449(242093)	琉球民謡	古典	コロムビア	黒字/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1935年2月発売	歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-2-14
田辺286	驚の鳥節	唄・三味線/大濱津呂, 唄・琴/崎山用能, 唄/仲本マサ子	28458(142073)	八重山民謡	八重山民謡	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1935年7月発売	見本品/CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-2-12
田辺286	鳩間節	唄・三味線/大濱津呂, 唄/仲本マサ子, 琴/崎山用能	28458(242121)	八重山民謡	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1935年7月発売	CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-2-14
田辺297	十七八節(一)	安富祖流師範/金武良仁	28987(1201757)	琉球古典音楽	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1936年発売	見本品/歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-2-1
田辺298	十七八節(二)	安富祖流師範/金武良仁	28987(2201758)	琉球古典音楽	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1936年発売	歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-2-1
田辺297	十七八節(三)	安富祖流師範/金武良仁	28988(1201759)	琉球古典音楽	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1936年発売	見本品/歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-2-1
田辺298	十七八節(四) 附:中城はんだ前節	安富祖流師範/金武良仁	28988(2201760)	琉球古典音楽	古典	コロムビア	黒地/金文字	MADE BY NIPPONPHONE CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1936年発売	歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(上)』Disc-2-2
田辺290	安里屋ユンタ	唄/大濱津呂・崎山用能・仲本マサ子, ピアノ・ヴァイオリン/伴奏	A1452(142114)	民謡	新民謡	コロムビア	えんじ地/金文字	MADE BY NIPPON COLUMBIA CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1952年7月発売(再プレス)	歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-2-22
田辺290	鳩間節	唄・三味線/大濱津呂, 唄/仲本マサ子, 琴/崎山用能	A1452(242121)	民謡	古典	コロムビア	えんじ地/金文字	MADE BY NIPPON COLUMBIA CO. LTD. KAWASAKI, JAPAN	1934年録音/1952年7月発売(再プレス)	歌詞カード/CD『沖縄音楽の精髄(下)』Disc-2-14
田辺289	ちんばら小・赤山	山内昌徳/太鼓, 三線, サンバ, 指笛/伴奏	A3046(1219037)	沖縄民謡	沖縄民謡	コロムビア	えんじ地/銀文字	Made by Nippon Columbia Co., Ltd. Kawasaki, Japan	1958年録音/1958年7月発売	歌詞カード/NHK第11回のど自慢 コンサート全国大会出場
田辺289	宮古娘・汗間当	山内昌徳/太鼓, 三線, サンバ, 指笛/伴奏	A3046(2219038)	沖縄民謡	沖縄民謡	コロムビア	えんじ地/銀文字	Made by Nippon Columbia Co., Ltd. Kawasaki, Japan	1958年録音/1958年7月発売	歌詞カード/NHK第11回のど自慢 コンサート全国大会出場

5.4.1 1948年発売「個人吹込み」6枚1組

1948年元沖縄日蓄・渡口真明の個人事業として、SP6枚1組(870円:PR-253~PR-258)が販売された。曲目は《かぎやで風節》《こてい節》《仲間節》《伊計離節》《干瀬節》《安里屋ユンタ》《述懐》《宮古根・山原手間當》《四季口説》《浜千鳥節》《仲里節》《根間の主》である。南風原文化センター所蔵SPを見ると、「個人吹込み」と明記され、製造はコロムビアである。

1948年5月25日『沖縄新報』Bに「音盤に鳴る琉球古典音楽／よみがえる巨匠の声」の記事が掲載された。「沖縄人連盟や沖縄財閥では、金武、伊差川両氏を中心に、古堅その他の師匠格が戦前コロムビア会社に吹き込んだレコードの再出版を企画…中略…話は順調に進行しつつあったが、元沖縄日蓄主人渡口真明氏の乞ひを容れ、同氏個人の事業に移し出版の気運を促進させることとなった」とある。沖縄日蓄とは那覇市旭館横通りにあった店で、コロムビアを初めとするレコードを販売していた(1940年9月17日『沖縄日報』)。沖縄日報社編1937:317にも沖縄蓄音器商組合に「沖縄日蓄 渡口真明 那覇市西本町5-19」と記録された。

1948年6月5日『沖縄新報』A(図8参照)には広告「待望の名盤色々発売!一流名人の吹込 琉球民謡集コロムビアレコード 第1回発売曲目全6枚 1回定価150円也 6枚1組870円也」が掲載されている。「総販売元:渡口真明(元沖縄日蓄)兵庫県

芦屋市/関東地方取次所:沖縄財閥(東京都丸ビル)/関西地方取次所:沖連 大阪総本部/九州総代理店:金城南邦(別府市)」とある。『沖縄新報』は九州各地に疎開していた沖縄出身者のための情報紙として福岡で創刊された新聞である。新聞を通じて九州以外の関東、関西の沖縄系エスニック・コミュニティに伝わることを想定し、宣伝広告を掲載したことがわかる。

その後、『沖縄新報』では広告「郷土音楽の一大金字塔 琉球音楽の決定盤売出 6枚1組900円外に送料100円/九州地区特約店:金城南邦(別府市曙通り2丁目)」が1948年8月15日、8月25日、9月5日、9月15日、10月5日の5回に亘り掲載された。その宣伝文に「海外への贈物、郷土への土産、自家の鑑賞に至急申込まれよ」とある。海外へ移民した沖縄出身者へ贈る、沖縄帰郷時のお土産、家庭で鑑賞するなど、レコードの多様な使用方法が具体的に示された。特に、沖縄では戦前から海外渡航した移民が多く、「渡航前にレコードを購入し移民先に持参する、または、渡航後に家族や親族がレコードを移民先に送ることが多かった」(高橋2016:227)。そのため、上記の宣伝文を打ち出したと考えられる。その後、1951年3月5日『沖縄新報』Bにも沖縄財閥(福岡市箱崎米一丸 沖縄財閥九州支所)による広告が掲載されている。

註文殺到・豫約受付中

九州總代理店
金城南邦
別府市上の濱區脇通二丁目
電話二五七六番

待望の名盤
色々発売!
一流名人の吹込
琉球民謡集コロムビアレコード

第一回發賣曲目
全六枚 六枚一組金八百七拾圓也
一枚定價金百五拾圓也

總販賣元
渡口真明
(元 沖縄日蓄)

兵庫縣芦屋市吳川町八

蓄音器も各種取扱致します。附屬品取換、修理も致します。御照會下さい

根間里の主節	仲里節	濱千鳥節	四季口説	述懐	宮古根小、山原手間當	安里屋ユンタ	干瀬節	伊計離節	仲間節	かぎやで風節	こてい節
友利明令	多嘉良朝成	赤嶺京子	比嘉初子	安里キク子	金武良仁	仲本マサ子	大濱津呂	新盛保	金城初子	伊差川世端	金武良仁

図8 1948年6月5日「広告 琉球民謡集コロムビア」『沖縄新報』A

5.4.2 1963年発売 SP『金武良仁集 第一集／第二集』

1963年SP『金武良仁集 第一集』(8枚組)、SP『金武良仁集 第二集』(8枚組)が沖縄タイムス社より発売された。金武良仁が1934年、1936年に録音した音源を『第一集』『第二集』(TF-105～TF-120)に分けて収録してある。なお、SP『金武良仁集 第二集』と歌詞・解説書は沖縄県立図書館で所蔵している。

レコード番号と収録曲は以下の通りである。

SP『金武良仁集 第一集』

- TF-105:かぎやで節／本花風節
- TF-108:仲村渠節(上)／仲村渠節(下)
- TF-109:ちゃんなあ節(上)／ちゃんなあ節(下)
- TF-112:暁節(上)／暁節(下)
- TF-113:茶屋節(一)／茶屋節(二)
- TF-114:下出仲風節／茶屋節(三)附 早作田節
- TF-116:下出述懐節／昔蝶節(三)
- TF-117:今風節(一)／今風節(二)

SP『金武良仁集 第二集』

- TF-106:仲間節／散山節
- TF-107:遊子持節／述懐
- TF-110:首里節(上)／首里節(下)
- TF-111:諸鈍節(上)／諸鈍節(下)
- TF-115:昔蝶節(一)／昔蝶節(二)
- TF-118:今風節(三)／東江節
- TF-119:十七八節(一)／十七八節(二)
- TF-120:十七八節(三)／十七八節(四)

5.4.3 1970年発売 LP『歌聖 金武良仁集』

1970年2枚組LP『歌聖 金武良仁集』DTL-120～121がROKレコードから発売された。解説書の奥付には監修:金武良章・仲井真元樞、企画:大城盛文、制作:金城八寿江、表紙紅型:那覇市三笠屋、印刷:琉球新報社出版印刷部、製造:キングレコードとある。

レコード番号と収録曲は以下の通りである。

- DTL-120(1面)1.かぎやで節、2.中城はんた前節、3.じゃんなあ節、4.茶屋節、5.東江節、6.下出仲風節
- DTL-120(2面)1.仲間節、2.早作田節、3.首里節、4.昔蝶節、5.遊子持節、6.下出述懐節
- DTL-121(3面)1.こてい節、2.諸鈍節、3.十七八節、4.本花風節、5.散山節
- DTL-121(4面)1.仲村渠節、2.謝敷節、3.暁節、4.今風節、5.述懐

LP解説書には金武良仁の年譜と写真の他に、田辺尚雄、本田安次、三隅治雄、古波蔵保好、鈴木憲進(屋部憲通の息子:旧姓・屋部)、中山興真、中村完爾が文章を寄せている。田辺は1922年沖縄音楽調査の際、良仁による路次楽、安富祖流の古典演奏を聴いた日々を回顧し、「それ以来私は極力金武さんの吹込まれたレコードを集めて大切に秘蔵している。作田節等時々出しては聞いて楽しんでいる」(田辺1970:5)と綴った。田辺文庫の日本コロムビアSPこそ、田辺が秘蔵していたものである。

また、金武良章は「父を語る」と題し、琉球王国時代の「国芸を守ることによつての御主人御奉公即ち琉球音楽の面目をという観念が強く働いていた」良仁の人生を振り返った。1936年日本コロムビア東京本社における録音について、「昭和11年東京公演を終えての直後疲れるからと技術者の要求テストも断り、一気に16曲を録音して帰り、それから3ヵ月後の風雨暴れ狂う9月1日父はこの世を去りました」(金武1970:9)と記した。その時の音源がLP『歌聖 金武良仁集』として蘇り、世に送り出されたのである。

また、1969年9月27日～28日にLP『歌聖 金武良仁集』発売記念「ラジオ沖縄創立10周年記念 金武良章リサイタル」が琉球新報ホールで開催された。両日のプログラム(沖縄県立図書館所蔵)に「7.レコード鑑賞 歌・三味線:金武良仁」とあり、「述懐」《散山節》の歌詞が掲載されている。2曲のレコードを再生し、観客に聴かせたと推察される。だが、1934年～1936年発売のSP、1948年発売「個人吹込み」SP、1963年発売SP『金武良仁集 第一集／第二集』のいずれのレコードを使用したかは不明である。なお、LP『歌聖 金武良仁集』は沖縄市音楽資料館おんがく村に所蔵されている。

5.4.4 2000年発売CD『SP盤復元による沖縄音楽の精髓(上)(下)』

2000年沖縄音楽のSPをデジタル化したCD『SP盤復元による沖縄音楽精髓(上)(下)』(COCJ-30859～62)がコロムビアから発売された。「昭和初期からの幻のSP盤を復元—沖縄の伝説的名演奏者による初の音楽(うた)集成!」と銘打った。解説書には、田辺秀雄が「田辺尚雄の沖縄音楽調査旅行(大正11年)とSPレコード」、三隅治雄が「幻の巨匠たちが奏でる三線音楽の精髓」というタイトルで推薦文を寄せている。さらに、大城學は「幻のSP盤～蘇る沖縄民謡～」で沖縄音楽と歌手・演奏家の系譜を概観し、詳細な「歌詩・曲目解説」も記した。また、SP盤提供・制作協力として「田辺秀雄、南風原文化センター、三隅治雄、大城學」の名が記載された。2000年時点では田辺文庫に寄贈される前のSPを秀雄が所蔵していた。また、南風原文化センターにも数多くのSPが所蔵されている。双方所蔵のSPから選曲・復元し、CDとして世に送り出したのだろう。

本CDにはニッポノホンから1トラック、コロムビア1934年～1936年SPから58トラック、コロムビアの廉価盤リーガルか

ら2トラック(1940年)を収録している。解説書に記載はないが、筆者の研究資料とCD音源を照合したところ、他に大阪蓄音器、トモエ・レコード、ツル・レコード(アサヒ蓄音器商会)の音源が含まれていた。大阪蓄音器とトモエ・レコードの音源については前述したが、ツル・レコードについては別稿で論じたい。

さらに、2008年にはCD『SP 盤復元による沖縄音楽の精髓(1)(2)(3)(4)』(COCJ-35012、COCJ-35013、COCJ-35014、COCJ-35015、コロムビア)の4枚が発売された。(1)(2)(4)は2000年CDから選曲・収録したものである。(3)のみCD『沖縄音楽総攬(上)』(COCJ-34505、コロムビア、2007)から奥間盛正の古典6トラック、他のレーベルから仲泊兼蒲の古典6トラックが収められた。

5.4.5 2007年発売CD『金武良仁全曲集～名人の呼吸が聴こえる～』

金武良仁の音源は需要が高いと見込んだのか、コロムビアとは別に、2007年沖縄音楽専門レーベルのシナルフォンレコード(沖縄市)から2枚組CD『(名盤復刻)金武良仁全曲集～名人の呼吸が聴こえる～』(30NCD-1008～9)が発売された。1963年SP『金武良仁集 第一集』SP『金武良仁集 第二集』(TF-105～TF-120)の全32トラックに加え、『こてい節』のみ1948年「個人吹込み」PR-253から復刻された。

ライナーノーツには崎間麗進が「楽聖金武良仁の歌三線」、上原直彦が「名人の呼吸が聴こえる」と題して推薦文を寄せた。さらに、CDをプロデュースした小浜司が山城政幸(SP所蔵者で共同プロデューサー)との対談「復刻盤発売にあたり山城政幸に聞く」も掲載された。山城はSPをEMGエキスパート・オーバーホーンX(イギリス製)という蓄音器で再生したことを明かし、「金武良仁の奏でる三線の神経質な音を再現するためには、針もEMGを使わねばならなかった。日本製は少し固いです。急いでイギリスから取り寄せました」(小浜・山城2007:12)と、SP復刻にかけた技術的な秘策を語った。

5.5 1958年NHK「のど自慢全国大会」出演の山内昌徳

山内昌徳(1922-2017)が東京のコロムビアでSP『宮古根(筆者注:ナークニー)・汀間当/ちんぼら小・赤山』A3046を録音したのは1958年3月のことだった。山内は1958年1月琉球放送RBCラジオ主催「素人のど自慢大会」(赤丸宗提供)民謡の部で1位となり、同年3月「第11回NHKのど自慢全国コンクール」にオブザーバーとして参加した(山川編1983:719参照)。その時歌ったのが『宮古根』であった。録音の経緯について、次の記事がある。

日本コロムビアでは山内さんの声を見込んで、吹き込みを依頼してきた。山内さんは心よく応じ、コンクール大会で歌った「宮古根」「手間当」の2曲を吹き込んだ。そして沖縄に帰ったもの

だが、17日琉球放送東京支社を通じ、同氏の元へ「7月末からこのレコードを全国一斉に発売する」との朗報が舞い込み本人や関係者を喜ばせている。(1958年4月20日『沖縄タイムス』6)

「素人のど自慢大会」は1954年琉球放送RBCラジオが開局した翌年1955年1月2日に開始した長寿番組である。「沖縄本島はもとより宮古、八重山、久米島、伊江島の各離島までくまなく公開録音を行ない…中略…多くの民謡歌手を育てあげている」(琉球放送編1965:62)。そして、「この番組は…中略…1958年3月からNHKの全国大会に沖縄も1地区と認めて出場させる交渉がなりたち、沖縄から歌曲1人、民謡1人、歌謡曲1人を選んで東京の檜舞台で全国代表とを競うまでに発展していった」(琉球放送編1965:145)。

1958年「第11回NHKのど自慢全国コンクール」に参加する沖縄代表選抜大会は、同年3月3日那覇市沖映本館で民謡9名、歌謡曲10名の代表によって行われた(1958年3月4日『沖縄タイムス』3)。山内によると、民謡の部には宮良高林、大浜安伴、嘉手苺林昌など名だたる歌い手が参加したという(琉球放送編2005:250参照)。結局、山内の『宮古根』《山原汀間当》が1位を獲得し沖縄代表に決定した。

1958年3月21日東京日比谷公会堂で開催された「第11回NHKのど自慢全国コンクール」にはオブザーバーとして民謡の山内昌徳、歌謡曲の高津よしえが出演した。2人は「割れんばかりの拍手に迎えられて登場、この番組は入中放送(筆者注:生放送の番組中に外から中継が入る)で全琉のラジオ聴取者に深い感銘を与えたが、当時の沖縄では、これを「歌の日本復帰ができた」と聴取者やNHK関係者を感激させたエピソードもあった」(琉球放送編1965:145)。

沖縄の正式参加が決まった1959年、山内は「NHKのど自慢沖縄地方大会」民謡の部でも『宮古根』を歌い1位となり、「第12回NHKのど自慢全国コンクール」に連続出場した。「昌徳の独特な甘いソフトな歌声は、ファンを魅了し…中略…のど自慢大会参加後、昌徳の人気は一気に上昇した。レコーディングも増えた」(大城1996b:54-57)。そして、山内が「歌った『ナークニー』が大ヒット。『100年に1人の美声』と称される『山内ナークニー』は第1期民謡ブームの先駆けとなったのである」(小浜2014:68)。

『ナークニー』が大ヒットした要因として、山内がコロムビアA3046以外のレーベルからも『宮古根』を録音したことが挙げられる。例えば、三線・歌:山内昌徳・嘉手苺林昌、SP『宮古ノニ小/手間当節』(マルフク、784、1957)、三線・歌:山内昌徳、SP『宮古根小/手間当』(マルタカ、T-881、1958)がある。いずれも「NHKのど自慢全国コンクール」の前後の時期に発売された。

なお、A3046は1961年にEP『ちんぼら小・赤山/宮古根・汀間当』(コロムビア、SA-554)として再発売された。2018年にはEP『Kanasu Remixes NAHKNY-TIIMATOH(筆者注:宮古根・汀間当)』

(コロムビア、COKA-64)が発売され、山内が歌うA3046のトラックをオオルタイチがリミックスした。この音源はCD『ハイサイ！沖縄』（コロムビア、COCJ-40467、2018）にも収録されている。



写真 16 山内昌徳、SP『宮古根・汀間当』
コロムビア:A3046

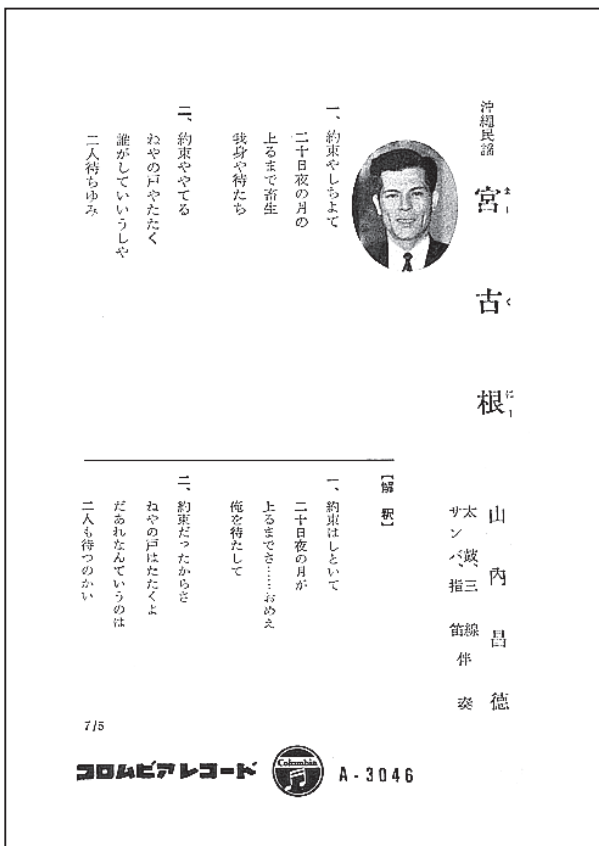


図9 SP『宮古根・汀間当』歌詞カード
コロムビア:A3046

まとめ

本稿では1915年～1936年、1958年に発売された沖縄音楽SPレコードについて整理した。沖縄に録音メディアが導入され大衆に普及する過程、つまり近代沖縄における録音文化史の萌芽期を描き出したことになる。森楽器店は1915年～1926年に計4回録音しており、本稿では第1回～2回録音の実態を明らかにした。沖縄音楽専門レーベルのトモエ・レコードは1934年～1936年に少なくとも5回録音しており、レコードの需要の増加を反映していた。

特筆すべきは、商業録音による最古の沖縄音楽レコード、大阪蓄音器1915年制作のSP6枚が発見されたことである。本稿の発表を機に、最古の沖縄音楽レコードに脚光が当たることを切に希望する。

レコード制作は人選、選曲をした後、レコーディングを実施する。その後、録音音源は技師などのレコード制作者が大阪や東京の会社に持ち帰り、レコード盤として製造する。そして、商品化されたレコードは船で沖縄へ運ばれ、商店などで販売される。この一連のレコード制作・販売の過程がレコード盤の情報、新聞記事・広告などから明らかになった。

歌手・演奏家の人選に関しては、古典が安富祖・野村の各流派を代表する演奏家から選ばれた。沖縄民謡、八重山民謡は商業演劇の世界で活躍した俳優や地謡を起用し、歌劇や沖縄芝居の劇中で歌われるレパートリーを録音した。また、女性は歌や楽器に長けているジュリや芸妓を起用した。コロムビアの古典は上記と同様だが、宮古民謡や八重山民謡は男女共、各島で優れた歌い手・三線奏者として名高い人物を選出した(高橋 2010a、高橋 2012a 参照)。

選曲について、大阪蓄音器は古典が多く、日本蓄音器商会は沖縄民謡が多い。トモエは古典の曲目を御前風、本節、元節、踊節などにジャンル分類していた。コロムビアも古典を重視していたが、『安里屋ユンタ』に代表される新民謡も積極的に録音した。一方、ニッポン・レコードでは山内盛彬が琉球方言の歌詞を共通語訳した『訳詩琉球民謡』を録音した。この斬新な取組みは、沖縄にルーツをもたない日本本土の人々や社会に向けて、いかなる音楽をどのような方法で発信し得るかという課題への方策でもあった。講演や演奏活動を通じて、本土の聴衆と度重なる接点があった山内だからこそ、抱いた課題である。山内は詩人・佐藤惣之助と共同で本土への〈外向き〉発信を先駆的に進め、ラジオ、レコード、演芸会、雑誌論文を通じて作品を発表した。

大部分の音源は三線、笛、太鼓、琴、胡弓、四つ竹など琉球楽器を使用した。一方、トモエ『汗水節』ではバイオリン、ピアノ、シロホン(木琴)を使用し、コロムビア『安里屋ユンタ』ではバイオリン、ピアノを使用した。両曲は新作の民謡であり、洋楽器を積極的に導入することで多様なサウンドを追求した。

レコードの制作は森楽器店、自声堂楽器店、ヨシヤ楽器店など、那覇市内の楽器店が発行元になっており、商店街の発展・活性化と連動している。レコードの宣伝に関して、森楽器店や自声堂は新聞広告を掲載した。新規録音のレコード情報を読者に告知し、希望者には目録を送呈するなど、活字メディアを積極的に活用した。

また、制作システムについて、トモエは録音のみ自声堂・ヨシヤ楽器店で行い、レコード盤の製造は本土のオーゴン・レコード、帝国蓄音器などに委託した。この点はマルフク・レコード、ツル・レコード、ヤマキ・レコードなど他の沖縄音楽専門レーベルと共通する。

田辺とSPとの関連については次の通りである。大阪蓄音器SPは1922年沖縄調査の折、那覇市内で購入した。日本蓄音器商会、ニッポン・レコード、コロムビアとは研究や演奏活動を通じて交流があった。トモエのみ関係が不明だが、製造元のオーゴン・レコードは東京にあるため、何らかのルートで入手したと考えられる。

本稿で明らかになったのは、録音→製造→宣伝という基礎的な商業録音システムが1915年～1936年に成立していたことである。沖縄では1955年～1960年代にかけて、沖縄音楽専門レーベルが次々に設立された。ラジオやジュークボックスの普及と相俟ってレコード産業が隆盛を極めた時代の現象は、戦前の商業録音システムの延長線上に位置付けられる。

田辺尚雄旧蔵レコードが21世紀に生きる私たちに語りかけていることはあまりにも多い。機会を改めて別稿で述べたい。

謝辞

本論をまとめるにあたり、沖縄県立芸術大学附属図書館、沖縄県立図書館、大西秀紀氏には貴重な文献・音源資料を御提供いただいた。本研究は日本学術振興会科学研究費(平成29～32年度、基盤研究(C)17K02365:研究代表者・高橋美樹)「沖縄音楽における現地録音の歴史的研究—田辺尚雄からLP『沖縄音楽総攬』まで」の助成を受けたものである。

注

- 1)岡田 1991年8月:103 には東洋蓄音器が日本蓄音器商会に買取される前のレーベルが掲載されている。天勝一行「越後獅子」(オリエンT A888)のデザインは0-23、0-24 とほぼ同じであり、製造は東洋蓄音器合資会社と記されている。
- 2)永村清蒲・仲本愛子のSP『漫談 塩家のパーパー』(S-532)は1970年代にEPで復刻発売された(FE-145)。同曲はCD『チャンプルー・シングルスVol.1〜ピストン・カチャーシー』(東芝EMI、TOCT-8985、1995)で聴くことができる。また、CD12枚組『沖縄民謡大全集』(ANOC6104～6115、エニー、2007)には同曲とSP『歌劇 農村早起唄』(S-531)の音源が収録された。

3)山入端 1996:33-35 には、山入端つるが〈恋の花カメ〉と大阪で再会した時の様子が描かれている。

4)1917年10月16日『朝日新聞』1の広告では1円50銭の50銭引き、つまり1円で販売する割引値段の改正を告知した。定価の5割引から50銭引きへと改正したのである。

5)1917年9月14日『朝日新聞』1の広告では、「何故、ユーホンが能く売れるか!」と題して、「持運びに軽くて、室内用にも、旅行用にもなる」とその機能を宣伝している。

6)日本蓄音器商会・京城出張所1921にはニッポノホン「鷲印朝鮮音譜御案内」が掲載され、レコード番号6001～6267の曲名、作曲者が並んでいる。沖縄音楽SPは6500番台であり、朝鮮音楽SPの6000番台に続く番号である。この点は大西秀紀氏からのご教示により筆者も調査し、上記を確認した。

7)生没年は仲井真 1965年6月6日:12、真栄田 1981:178 に拠る。

8)1906年4月6日『琉球新報』球陽座の広告には嘉手納良芳、名嘉山の名前が、1907年3月5日『琉球新報』同広告には嘉手納、永村清蒲の名前が確認できる。

9)現行の民俗芸能としてのチョンダラーは成年男子10～30人ほどで演じられる舞台芸能であるが、これらはいずれも近代以降、首里・那覇の商業演劇を受容したものである。その本来的なありかたは、人形をつかった小人数(人形遣い2人、太鼓打1人の都合3人)の門付芸能であったといわれるが、近代に入って消滅したとみられる。(波照間 2008:342 参照)

10)「訳詩琉球民謡」に関しては1918年5月「琉球の小唄(琉歌訳)」を発表した世礼国男の先駆的な試みがある。世礼は1922年2月詩集『阿旦のかげ』を曙光詩社から出版し「琉歌訳二十八篇」を巻尾においた。同年11月に発表されたのが佐藤惣之助『琉球諸嶋風物詩集』である。世礼、佐藤にみる「琉歌訳」詩の動向は仲程 1986:843-870、仲程 1996:33-51 を参照されたい。なお、世礼は「をどり(琉歌改作)」「阿旦のかげ(試作)」「盆踊(山内盛彬氏の作曲あり)」3篇の表題を「琉球情調」とし、詩集『阿旦のかげ』で発表した(仲程 1986:869 参照)。ここに山内と世礼の接点を確認できる。

11)佐藤は1922年海洋詩集制作のため沖縄本島や八重山諸島を訪問した。「20日間の滞在中、沖縄県立図書館長の伊波普猷と八重山の測候所長岩崎卓爾博士から、『おもしろさうし』や琉球民謡などを伝授され、琉球文化への造詣を深め、また人々の暮らしのなかに琉歌が根付いていることに感銘を受けた…中略…年末には『琉球諸嶋風物詩集』、翌年には海洋詩集『颱風の眼』を刊行、最初の俳句集『螢蠅虚句集』は沖縄から出版されている」(川崎市市民ミュージアム編 2008:66)。1925年7月1日『日本詩人』5巻7号に「八重山諸島民謡意識」を発表した。1941年SP『美わしの琉球』(歌:伊藤久男、作詞:佐藤惣之助、作曲:竹岡信幸)がコロムビアから発売された。

12)岡田 1992 年 5 月:110、参考 URL:ニッポン・レコードを参照した。

13)SP『吉備楽 明石の浦(上)(下)』2915～2916(唄・箏:平井佐知子、箏:田邊尚雄)、SP『吉備楽 高砂(1)(2)』2917～2918(唄・箏:平井佐知子、箏:田邊尚雄)、SP『吉備楽 高砂(3)』2919(同上)が京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター「田邊氏寄贈コレクション」に所蔵されている。SP 情報は下記の日本伝統音楽研究センター収蔵資料データベースに拠る。ARTIZE:http://neptune.kcuu.ac.jp/cgi-bin/kyogei/index.cgi

14)SP『網代小唄/富士の初雪』は共に独唱:立石智重子、伴奏:東京ジャズバンド。SP は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター「田邊氏寄贈コレクション」に所蔵されている。

15)1934 年録音《黒島節》(歌:伊差川世瑞、三線:又吉栄義)CD『SP 盤復元による沖縄音楽の精髓(上)』(コロムビア、COCJ-30860、2000)も聴取し確認した。

16)三島 2014:253-254 では高橋の〈内向き〉〈外向き〉の枠組みを援用し、「訳詩琉球民謡」を捉えている。

17)知名定男の活動は高橋 2010a 参照。定男の父・定繁(第 10 代琉球民謡協会会長)は大阪在住時、又吉栄義に古典を師事していた(知名 2006:9-22、山川編 1983:694「知名定繁」参照)。

18)親泊興照の経歴は日外アソシエーツ編 2004a「親泊興照」、1996『親泊興照 生誕百年記念芸能祭』プログラムを参照した。

19)糸数カメの経歴は日外アソシエーツ編 2010「糸数カメ」、大城 1996a:26-29 を参照した。

20)本論で「再発売」として取り上げた音源は、筆者が SP 盤と目録・新聞記事(文字情報)を照合し確認したものである。なお、1946 年 12 月 15 日「琉球音楽レコード△注文募集△」『自由沖縄』4 ではコロムビア 1934 年～1936 年 SP から 16 枚の曲目・歌手一覧を示し、1 枚買:35 円、16 枚 1 組:480 円で注文を受け付けた。しかし、実際に SP が発売されたかは不明であるため、本論では取り上げなかった。

参考文献

青い海大阪支社編集部 1980 年 3 月「関西琉球古典音楽の 50 年を遡る」『青い海』91 号、青い海出版社、pp. 64-69

浅香怜子 2014『琉球の花街 辻と侏儸(ジュリ)の物語』榕樹書林
生明俊雄 2016『二〇世紀日本レコード産業史:グローバル企業の進取と市場の発展』勁草書房

池宮喜輝 1987『琉球芸能教範』月刊沖縄社

池宮正治 1975「第 3 章 演劇/第 1 節—第 3 節」『沖縄県史 6 卷(各論編 5 文化 2)』沖縄県教育委員会、pp. 171-232

上原直彦 1986「徳之島ちゅっきり節」『語やびら島うた』那覇出版社、pp. 149-151

大城學 1996a「糸数カメ」『沖縄新民謡の系譜』ひるぎ社、pp. 26-29

大城學 1996b「山内昌徳」『沖縄新民謡の系譜』ひるぎ社、pp. 54-57

大城學 2000「永村清蒲『キザミ節』解説」CD『SP 盤復元による沖縄音楽の精髓(下)』(コロムビア、COCJ-30861～62、2000)、p. 22

太田好信 1998『トランスポジションの思想』世界思想社

太田良博・佐久田繁編 1984『沖縄の遊郭 —新聞資料集成—』月刊沖縄社

大西秀紀編 2011『SP レコードレーベルに見る日蓄—日本コロムビアの歴史』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

岡田則夫 1991 年 7 月「第 10 回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』10 巻 7 号、ミュージック・マガジン、pp. 116-122

岡田則夫 1991 年 8 月「第 11 回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』10 巻 8 号、ミュージック・マガジン、pp. 102-103、pp. 118-124

岡田則夫 1992 年 5 月「第 18 回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』11 巻 5 号、ミュージック・マガジン、p. 92、pp. 100-115

岡田則夫 1993 年 4 月「第 28 回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』12 巻 4 号、ミュージック・マガジン、p. 84、pp. 104-109

岡田則夫 2003 年 2 月「第 144 回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』22 巻 3 号、ミュージック・マガジン、pp. 152-157

岡田則夫 2016 年 7 月「第 206 回 続・蒐集奇談 見本盤とテスト盤」『レコード・コレクターズ』35 巻 10 号、ミュージック・マガジン、pp. 168-171

沖縄日報社編 1937『日報の沖縄人名録 昭和 12 年版』沖縄日報社

嘉手川重喜・松村興勝 1979 那覇市企画部市史編集室編「第 3 章 生業/第 5 節 商業」『那覇市史 資料編 第 2 卷 中の 7 (那覇の民俗)』那覇市、pp. 282-392

嘉手川重喜 1979 那覇市企画部市史編集室編「第 4 章 交通・運輸・通信・宿泊/第 1 節 陸上の交通と運輸/8 電車」『那覇市史 資料編第 2 卷中の 7(那覇の民俗)』那覇市、pp. 408-411

川平朝申 1974 那覇市史編集室編「第 11 章 新文化の流入と風俗習慣」『那覇市史 通史篇 第 2 卷(近代史)』那覇市、pp. 227-236

川崎市市民ミュージアム編 2008「3 川崎市出身の芸術家と沖縄/佐藤惣之助と沖縄」『オキナワ/カワサキ:二つの地をつなぐ人と文化』川崎市市民ミュージアム、pp. 65-68

関西沖縄興信社 1935『関西沖縄興信名鑑』関西沖縄興信社

喜舎場永珣 1934 年 10 月 21 日～1935 年 1 月 21 日「連載全 8 回 死線を越えてレコードの旅へ」『八重山民報』(石垣市総務部市史編集室編 1990『石垣市史資料編 近代 6 新聞集成』石垣市役所、pp. 519-525 所収)

清村まり子 2008「役者」『沖縄民俗辞典』吉川弘文館、p. 520

- 金武良章 1970「父を語る」LP『歌聖 金武良仁集』解説書、p. 9 (ROK レコード、DTL-120～121)
- 金武良章 1983「こてい節が電波に」『御冠船夜話』若夏社、pp. 188-201
- 久万田晋 1993「奄美諸島の音楽概観」日本放送協会編『日本民謡大観(沖縄・奄美)奄美諸島篇』日本放送出版協会、pp. 22-32
- 倉田喜弘 1979『日本レコード文化史』東京書籍
- 講談社編 2019「金武良仁」『日本人名大辞典』
- 小浜司・山城政幸 2007「復刻盤発売にあたり山城政幸に聞く」CD『(名盤復刻)金武良仁全曲集～名人の呼吸が聴こえる～』(ナルフォンレコード、30NCD-1008～9)ライナーノーツ
- 小浜司 2014「山内昌徳」『島唄を歩く1』琉球新報社、pp. 66-70
- 小林緑編著 1999「沖縄音楽の伝播に燃えたオール・ラウンド・プレイヤー／金井喜久子」『女性作曲家列伝』平凡社、pp. 291-295
- 佐藤惣之助 1925年7月1日「八重山諸島民謡意識」『日本詩人』5巻7号、新潮社、pp. 76-79
- 塩月亮子 2008「遊郭」『沖縄民俗辞典』吉川弘文館、pp. 534-535
- 世礼国男 1922 詩集『阿旦のかげ』曙光詩社
- 高橋美樹 2003「戦後沖縄における民謡歌手の変容 —世代別活動スタイルの比較を通して—」『ポピュラー音楽研究』6号、日本ポピュラー音楽学会、pp. 17-37
- 高橋美樹 2007「沖縄音楽レコード制作における〈媒介者〉としての普久原朝喜 —1920-40年代・丸福レコードの実践を通して—」『ポピュラー音楽研究』10号、日本ポピュラー音楽学会、pp. 58-79
- 高橋美樹 2010a『沖縄ポピュラー音楽史 —知名定男の歴史的研究・楽曲分析を通して—』ひつじ書房
- 高橋美樹 2010b「近代沖縄における録音メディアの導入 —ニッソーレコード制作の八重山民謡 SP 盤を対象として—」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要 沖縄芸術の科学』第22号、pp. 91-122
- 高橋美樹 2011「レコードに初めて録音された沖縄音楽 —1915年『琉球新報』と大阪蓄音器の活動を通して—」『高知大学教育学部研究報告』71号、pp. 229-242
- 高橋美樹 2012a「沖縄音楽レコードにおける〈媒介者〉の機能 —1930年代・日本コロムビア制作のSP盤を対象として—」細川周平編著『民謡からみた世界音楽 —うたの地脈を探る』ミネルヴァ書房、pp. 175-192
- 高橋美樹 2012b「異郷で聴く沖縄民謡 —北米・南米へ越境した丸福レコード—」『高知大学教育学部研究報告』72号、pp. 137-149
- 高橋美樹 2015「《安里屋ユンタ》の伝播・普及プロセス —レコードの分析を中心として—」『高知大学教育学部研究報告』75号、pp. 203-232
- 高橋美樹 2016「沖縄・日本本土・ブラジルを越境・還流する沖縄音楽レコード」根川幸男編『越境と連動の日系移民教育史 —複数文化体験の視座』ミネルヴァ書房、pp. 209-231
- 高橋美樹 2017「田辺尚雄の沖縄・八重山諸島音楽現地調査(1922年) —「田辺文庫」を基礎資料として—」『高知大学教育学部研究報告』77号、pp. 149-177
- 高橋美樹 2019「田辺尚雄における沖縄・八重山諸島音楽現地調査(1922年)の成果と社会的還元 —JOAK「日本音楽史講座」、歌舞伎舞踊劇『与那国物語』をめぐって—」『高知大学教育学部研究報告』79号、pp. 203-232
- 高良倉吉 2019「ジュリ」『日本大百科全書』小学館
- 田辺尚雄 1923a 年1月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(4)」『音楽と蓄音機』10巻1号、音楽と蓄音機社、pp. 58-61
- 田辺尚雄 1923b 年2月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(5)」『音楽と蓄音機』10巻2号、音楽と蓄音機社、pp. 12-26
- 田辺尚雄 1968 東洋音楽学会編『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』音楽之友社
- 田辺尚雄 1970「金武良仁さんの思い出」LP『歌聖 金武良仁集』解説書、p. 5 (ROK レコード、DTL-120～121)
- 知名定男 2006『うたまーい:昭和沖縄歌謡を語る』岩波書店
- テイチク株式会社社史編纂委員会企画・編集 1986『レコードと共に五十年』テイチク
- 照屋林助・普久原恒勇 1982「対談 島うた興亡記」『新沖縄文学』52号、沖縄タイムス社、pp. 68-77
- 東京蓄音器商組合 1934「全国蓄音器商組合連合会 名簿号」『蓄音器時報』1934年4月号
- 當間一郎 2019「組踊」『日本大百科全書』
- 渡嘉敷錦水 1949『琉球辻情話』銀嶺閣(沖縄郷土文化研究会編 1973『琉球花街辻情話史集』沖縄郷土文化研究社、所収)
- 内務省警保局図書課 1934「昭和9年6月蓄音機レコード発行所其の他調」内務省警保局(実物は調査したが未見。下記を参照。渡久地政司 <http://matoguchi.main.jp/zatubun/zatubun17.htm> 閲覧日は2019年9月30日)
- 内務省警保局 1938「蓄音機レコード製作所並発行所明細表 昭和13年末現在」内務省警保局図書課
- 内務省警保局 1981a「昭和9年中に於ける出版警察概観／第5編 蓄音機「レコード」の発行及取締状況並取締に関する法規」『出版警察概観 3』竜溪書舎、pp. 363-395
- 内務省警保局 1981b「昭和10年中に於ける出版警察概観／第4編 蓄音機「レコード」の発行及取締状況」『出版警察概観 3』竜溪書舎、pp. 559-595
- 仲井真元楷 1965年6月6日「明治大正昭和名優伝 13／嘉手納良芳丈」『琉球新報』p. 12
- 仲宗根幸市 1985「芝居歌謡『トゥータンカーニ』のルーツは」『南海の歌と民俗』ひるぎ社、pp. 123-128

- 仲宗根幸市 1998 「奄美の民衆歌人・成ちよ」『「しまうた」を追いかけて』ボーダーインク、pp. 245-266
- 仲程昌徳 1986 島尻勝太郎・嘉手納宗徳・渡口真清三先生古稀記念論集刊行委員会編『琉球景物詩十二篇』への飛躍 一世礼国男ノート』『球陽論叢』ひるぎ社、pp. 843-870
- 仲程昌徳 1996 「第4章 佐藤惣之助と沖縄の詩人たち」『琉球に魅せられた人々：外からの琉球研究とその背景(テレビ講座)』琉球大学公開講座委員会、pp. 33-51
- 那覇出版社編集部編 1992 『琉球芸能事典』那覇出版社
- 日外アソシエーツ編 1998 「金武良仁」『芸能人物事典 明治大正昭和』p. 208
- 日外アソシエーツ編 2004a 「親泊興照」『20世紀日本人名事典』
- 日外アソシエーツ編 2004b 「金井喜久子」『20世紀日本人名事典』
- 日外アソシエーツ編 2010 「糸数カメ」『新撰 芸能人物事典 明治～平成』
- ニッポンレコード 1930 『昭和5年5月トンボ印ニッポンレコード新譜御案内』
- ニッポンレコード 1932 『昭和7年正月トンボレコード新譜総目録』
- 日本貴金属時計新聞編輯局編 1921 『東洋時計貴金属 眼鏡蓄音器商工名鑑』日本貴金属時計新聞社
- 日本蓄音器商会・京城出張所 1921 「ニッポノホン／鷲印朝鮮音譜御案内」『音楽と蓄音機』8巻5号、蓄音器世界社
- 日本蓄音器商会編 1940 『日蓄(コロムビア)三十年史』日本蓄音器商会
- 日本放送協会編 1993 「取たん金ぐわ」『日本民謡大観(沖縄・奄美)奄美諸島篇』日本放送出版協会、p. 641
- 饒村曜 2019 「室戸台風」『日本大百科全書』小学館
- 野村流音楽協会編 1974 『野村流音楽協会 創立五十周年記念誌』
- 波照間永吉 2008 「チョンダラー」『沖縄民俗辞典』吉川弘文館、pp. 341-342
- 普久原朝喜 1975年6月「マルフク五〇年」『青い海』43号、pp. 31-33。
- 真栄田勝朗 1981 『琉球芝居物語』青磁社
- 三島わかな 2014 『近代沖縄の洋楽受容』森話社
- 三越編 1930 『琉球展覧会目録』東京三越
- 矢野輝雄 1993 『新訂増補 沖縄芸能史話』榕樹社
- 山内伶晃(盛彬) 1929年10月「放送と吹込を了べた訳詩琉球民謡」『民謡楽』6号、民謡楽社、pp. 6-10
- 山川修編 1983 『琉球音楽人物事典』山川出版
- 山口亀之助 1936 『レコード文化発達史 第壹巻 明治大正時代初篇』丸善
- 山入端つる 1996 『三味線放浪記』東恩納寛惇校閲、ニライ社
- 横田生 1918年4月「東洋、大阪両蓄音器会社の合併談」『蓄音器世界』5巻4号、蓄音器世界社、pp. 84-85
- 琉球放送編 1965 『琉球放送10年史』琉球放送
- 琉球放送編 2005 「山内昌徳」『琉球放送50年史』琉球放送、p. 250
- 1906年4月6日「芝居案内/上之芝居 球陽座 渡嘉敷一派」『琉球新報』p. 3
- 1907年3月5日「3月2日 旧正月 18日開演 球陽座」『琉球新報』
- 1913年6月22日「明日の観劇会/出演諸優の大勉強/型は冠船躍其儘」『沖縄毎日新聞』p. 3
- 1914年4月16日「花街たより/バイオリンに蛇が住んだ」『琉球新報』p. 3
- 1914年8月8日「廊ふうぶんろく/不景気で美音変る」『琉球新報』p. 3
- 1916年6月3日「手切れ金二百円の其後」『琉球新報』p. 3
- 1916年10月13日「隠れた芸人」『琉球新報』p. 3
- 1916年11月7日「広告 ニッポノホン鷲印両面盤定価の5割引で買える」『朝日新聞』p. 1
- 1917年1月3日「新春初芸題御披露/旧史仮名手本忠臣蔵」『琉球新報』p. 5
- 1917年4月16日「広告 第2回吹込琉球新音譜着荷/日本蓄音器商会特約店 森楽器店」『琉球新報』
- 1917年4月29日「琉球音譜到着 森楽器店」『琉球新報』
- 1917年9月14日「広告ニッポノホン9月の新譜/ユーホン定価金40円也」『朝日新聞』p. 1
- 1917年10月16日「広告ニッポノホン10月の新売出し」『朝日新聞』p. 1
- 1918年1月3日「新春初興行御披露/仮名手本忠臣蔵」『琉球新報』p. 4
- 1926年3月25日「最新譜レコード到着/高級地球印レコード1円/琉球レコード多数到着 石門通り 自声堂」『琉球新報』p. 4
- 1927年8月13日『読売新聞』「今ばんは旧のお盆の催しに/珍らしい『民謡の夕』/朝鮮の唄と琉球の蛇皮線を聴かせ/琉球及八重山群島民謡/蛇皮線 山内盛彬」p. 9
- 1927年8月13日『日刊ラヂオ新聞』「民謡の夕/琉球 八重山群島民謡(1)四季口説他 蛇皮線 山内盛彬」p. 3
- 1928年9月7日「御待ち兼ねの新琉球レコード/琉球レコードは最高級巴鶴印に限る/自声堂楽器部」『沖縄昭和新聞』p. 3 (同広告は1928年9月10日、9月13日、9月15日にも掲載)
- 1929年4月19日「今日のプログラム解説/蛇味線歌謡曲 佐藤惣之助訳詞 山内玲光編曲」『日刊ラヂオ新聞』p. 5
- 1929年4月19日「琉球出身の声楽家が唄う琉球の民謡/内地語に訳して編曲した新曲で/南国情緒の蛇味線で伴奏/蛇味線歌謡曲 山内玲光 玲琴:田辺禎一」『読売新聞』p. 9
- 1930年1月20日「広告 琉球展覧会 東京日本橋 三越」『読売新聞』夕刊、p. 1

1934年4月15日「昭和9年度新譜到着 トモエ琉球レコード／コロムビア特約店 自声堂」『琉球新報』p.1

1934年6月15日「トモエレコード 大平レコード特約店 よせだ時計店」『先島朝日新聞』p.2

1934年11月5日『東京朝日新聞』「ラヂオ けふの放送番組 5日月曜日/お昼の演芸」p.7

1934年11月5日『読売新聞』「ラヂオ/蛇味線の南国情緒/琉球の古典音楽を演奏/金武良仁さんが大阪から中継」p.10

1934年11月5日『九州日日新聞』「ラヂオ けふの番組 熊本/福岡/小倉/長崎:後0・05(大) 琉球古典音楽…安富祖流、琉球…金武良仁」p.1

1936年1月19日「歳末大売出し/楽しい御正月の御準備はヨシヤのレコードから/Tomoe ヨシヤ楽器店」『沖縄日報』p.1

1936年4月19日「トモエ琉球レコード3月新譜発売/自声堂」『沖縄日報』p.1

1939a年10月1日「恋の花カメ吹込のレコード/好評で再吹込み」『大阪球陽新報』p.3

1939b年10月1日「恋の花カメが一世一代の記念吹込み/南月商会」『大阪球陽新報』p.4

1940年9月17日「コロムビア リーガル発売/琉球レコード 1枚1円35銭/沖縄日蓄」『沖縄日報』

1948年5月25日「音盤に鳴る琉球古典音楽/よみがえる巨匠の声」『沖縄新民報』B

1948年6月5日「待望の名盤愈々発売!一流名人の吹込 琉球民謡集コロムビアレコード 第1回発売曲目全6枚 1枚定価150円也 6枚1組870円也」『沖縄新民報』A

1948年8月15日「郷土音楽の一大金字塔 琉球音楽の決定盤発売 6枚1組900円/九州地区特約店:金城南邦」『沖縄新民報』B

1951年3月5日「琉球古曲保存レコード 今は亡き一流名人の吹込琉球古典曲と民謡集:沖縄財団」『沖縄新民報』B

1958年3月4日「のど自慢沖縄一きまる/歌謡曲高津さん民謡は山内さん」『沖縄タイムス』夕刊、p.3

1958年4月20日「コロムビア社から朗報/山内氏の民謡売出す/手間当・宮古根など2曲」『沖縄タイムス』朝刊、p.6

1996「親泊興照芸歴」『親泊興照 生誕百年記念芸能祭』プログラム、pp.29-31

2016「山内盛彬」『日本人名大辞典』講談社

2018「玲琴」『大辞林 第三版』三省堂

2019「筑前琵琶」『大辞林 第三版』三省堂

2019年1月1日「沖縄歌謡 最古の音源/1920年北里氏が採録」『沖縄タイムス』p.1

2019年3月28日「【大阪】最古の沖縄歌謡 現代によみがえる/1920年に言語学者採録 大谷大がCDに」『朝日新聞』夕刊、p.5

2019年5月30日「北里録音蠟管を公開/県立図書館 最古の琉球古典音楽」『沖縄タイムス』p.25

参考音源

SP『金武良仁集 第一集』、SP『金武良仁集 第二集』(コロムビア、F105~TF120、1963)

LP『歌聖 金武良仁集』2枚組(ROK レコード、DTL-120~121、1970)、解説書

CD『SP 盤復元による沖縄音楽の精髓(上)』(コロムビア、COCJ-30859~60、2000)

CD『SP 盤復元による沖縄音楽の精髓(下)』(コロムビア、COCJ-30861~62、2000)

CD『(名盤復刻)金武良仁全曲集~名人の呼吸が聴こえる~』(シナルフオンレコード、30NCD-1008~9、2007)

CD『沖縄音楽総攬(上)』(コロムビア、COCJ-34505、2007)

CD『SP 盤復元による沖縄音楽の精髓(1)(2)(3)(4)』(コロムビア、COCJ-35012、COCJ-35013、COCJ-35014、COCJ-35015、2008)

EP『Kanasu Remixes NAHKNY-TIIMATOH』(コロムビア、COKA-64、2018)

CD『ハイサイ!沖縄』(コロムビア、COCJ-40467、2018)

参考URL

大阪蓄音器
<http://zarigani.web.infoseek.co.jp/spp/spp9.htm>
 (2019年5月30日閲覧)

ニッポン・レコード
<http://zariganisan.web.fc2.com/spp/spp11.htm>
 (2017年5月1日閲覧)